911.3
八

俳諧袖珍抄遺漏之部

古梓舎黙池輯

一 題より句を出さる時ハ狭く又句にひさる時ハ新題にはしる題に入題をおもくれしめて自在を得るし詩歌文章を味ひ心を向上の一路に遊ひ俳を心城に免くそうすへし

一 不易一時流行

一 他門の句ハ彩色のごとし当門の句ハ墨絵のごとくすへし彩色ハ花麗なれども墨絵の奥ふかみにハ及ず心ハ他門にかはりてさひしきを旨第一とす

一 先人ハ地をよく調へし新古の語や雲文字好み上手ハ法によらず所におもしろき語あり

一 等類俳諧第一に吟味すへし

一 古書撰集にやすれことをきこさす尽し

一 蕉門の風体を学ふ輩ハ先翁の語
ゆゑの百韻冬の日春の日猿みの
ひさごあら野炭俵を熟読す
べし 発句ハ時代〳〵を考へし
一 初心のうちハ句数をもとむへし
それより深く情をねりて大山を
こえて向の麓へ下る所を案す
べし 又人をこえんと游るものハ
すこしも七尺を事むへし さ様ハ心
かるく時々新様へやうつらん
心身きをおもひ古人の胸中をお
もはるへし
一 俳諧ハ中人以下のものとはやされ
るハ俗語手語とのみ覚えるゆゑ
俗語を書をあらさんとするなり
拙なるはつら云を俳諧と覚え
るるハ誤りしきことなり 俳諧ハ
万葉集の心にされハ貴とからく
賤とからく味ふへきそこ唐明す
へく中華の豪傑すら惺るなり

あし〳〵心のはやしきを郵とす
一 千里を行も一歩よりす 一句は
一の字よりなれハ先人指の化を学ひ一句も
条末なるをなすへし 句の姿を
専称の小風にて[illegible]つくり
して折し激風にはやなすもゆし
これ情を心重にすてを句の先
表わの風を観すへし 初心ハ花月
秋に情れすやへけるもくゆるへし
右の條々初心の法と云
一 先人ハ萬よりおもひ立ハ土城ハ宗祇の後
をおもひ更にわかれの縁ひ立ち
を右とさく一ある花折柳をまた
目られしくのあし〳〵萬ありて恋の
て旅をあ人ハさこそ思ひ花折柳ハ
昔楽を観象とすなるへくなれて学
ろくるふハ晴日て袖おもひ継子
の殺子の持引かれるゆく
も展りてうち思ひしなれ〳〵の細
そさ濡つまて泥よえつく杖をカ

一蕉門の風体を学ふ者まつ先翁の
ゆゑの百韻冬の日春の日猿みの
ひさごなとの歌仙炭俵を熟読せんす
へし発句ハ時代〻を考へし

一初心のうちハ句数をもとむへし
それより姿情をわかちて大山を
こえて向の麓へ下る心を要す
たとへハ丈をこえんと欲るものハ
すなハち七尺を求むへし是ハ心
高き時ハ新句得てやすきのゑん
心身きとなれハ古人の胸中をわ
かるへし

一俳諧ハ中人以下のものとなやまれ
るハ俗語平話とのミ覚えるゆへ
俗語平語を用ひさんとすれハ
此まハ俳諧の格を流行と覚

に曽良ハつれてゆく〳〵も吟られ
哉ハ笠嶋を見んと云日も又旅路
しきりに降り泥や蝶掃に旅衣をまとひ
それ或ハ隠をのまなりして情ふ
ま日もあり総ハ添出の末つゝる和月
すこしけしきゟて見ゆれ一とを
大和路よりけ入く出て物よるを
つゝれたるのま日のけをゑらりてし
優のしのやとをのんとするに村
鵜森よハまき所山ハいてゝかすこ
ゝる結句もよく似てるこのれとゆ
まゆのひたくすむかなさの地千萬
着のおかつかく咲ゝくゝるを
見よく
芭蕉翁て詠るころや着の花
新古今ゟ此うるゐさる歌なのう
二かくおるゆくかしのけしき様
の景色ともいはん
一 秋のけしめ苦さやすさゝて海
うぬる雲の鳥ハむしのりぞ禄を

とまりておそろしけなるに
稲妻のくらけちる夕暮なれ
淋しくゆくてなきしかたの様
の様よまされりてむつかしき
とち古より旅る翁の句稲妻や
くらけて面との入たよく人の知る
様ハそ此の名句ともいはんされと
発句のけしきをしられ季今とる
其の光あるとて
いれつやや閑の方ゆく五位の声
一 山里を常栄おそし梅花
翁さ東く此句をおくられしか
返辞に此句意二義に翁す入に
山里を悦ぞく梅の盛に常栄
のきゝるんとかゝる遅しとや
うけたまはらん又山里の梅さへ
うと万栄在の事あるすこし京
あつしまで談や待らん翁此返
辞にそくゆとへ家くて云季の
水無月に源河ならを通りさふ

らぬにはやりの折に看板をかけて
はくらんの好菜ありと記す佳なと
ちをあしかりくらくらんの菜ぶ
る人しとわきまひはするそれのし
らくんいはくらん病の賣るまと
よまき

一和尚白キもおかくりありしいた
世の皋八それ小町吟りと云付句文
しきようき趣向ありて宗しく
あひ入おる句もふりしろつそや
正意の念の序にて扱ひとつさあけ
て杖にもれむもひと云おる句あり
是よそとあひの人を見すまくく
小町の姿ありと句中の実を教
すまくしき扱採菜の思ひ
立をさしは只かくりける無
をしてと迷ひれいられしとそ
是は此句を付るこれそ浮世の事
くめるより百とせの姥になる筏
さましくる豪家の旨と云俳

中の冬ともよ云ひの木は三三子よく出
色しと承るべしうりしとく

一今年貞享の古式をあらためて出
家の附句にあるすをいはるし参
排令の物すみまて文華を排凡
兆ホをそへのかし文葉月花の定を
定るもの也

掟五ヶ條

一月花　一句
一出合　差近
一短冊　持参
一高筮　深册
一諸礼　停止

芭蕉庵桃青判

一諸礼停止
一出合差近　但本定
一一句一直　定月花一句

右三ヶ條寫式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 一宿なすとも故なくは再宿すへからす樹下石上に臥とも暖なる莚と思ふへし

一 腰に寸鉄たりとも帯すへからす惣して物の命をとる事なかれ

一 君父の讐ある家は門前も避へし俱に天をいたゝかさる思ひさる情あれはそ

一 衣類器財相応にすへし過たるもよろしからす足さるも其のうは程あるへし

一 魚鳥獣の肉を好て喰ふへからす美食珍味にふける人は他事にうつれ安きものは菜根を喰て百事をなすへき修をおもふへし

一 人のもとめなきに己か句を出すへからす求を背くも鄙しく思へる説は説るゝ間に於されはよろしからす

一 あらそひ喧嘩の所へ近よるとも所労の念をおこすへからす業人の中に座すとも避るへし

一 みたりに草木を折紙一枚の枯枝も己か度科となすへし

一 好て酒を飲へからす饗応にて固辞かたくとも微醺にして止へし乱に及はすの類なし祭祀の戒條に酒を用ゆる故をおもへは酒は遠さくるの訓ある情をしるへく

一 聊諸家代をとする人あらは

一 他の短を挙て己か長を顕す事なかれ人を譏ておのれにほこる事甚いやし

一 俳諧の外雑話すへからす雑話出れは居眠りして労を養ふへし

一 女性の俳友に親しむへからす師にも弟子にもいらぬものなり此事は

釈迦も美人をもて修行の障とし男女の交は胴を立ることく流落すれは心散一なれは道は全一

行脚掟

一　一宿なすとも故なきに再宿すべからず樹下石上に臥すともあたゝめたるむしろと思ふべし

一　腰に寸鉄たりとも帯すべからず惣じて物の命をとる事なかれ

一　君父の讐あるものにまじはるも拝ゑよし但し天をいたゞかざる思ひさらば情あれども

一　衣類器財相応にすべし過たるはよからず足らざるも其のよからず程あるべし

一　魚鳥獣の肉を好て喰ふべからず美食珍味にふける人は他事に走れ易きもの也菜根を喰て百事をなすべし語をおもふべし

一　人のもと求めなきに己が句を出すべからず望を背くも鄙しくば思はざるに説は説ずば聞に益なきはよろしからず

一　あやしき嶮岨の境たりとも所労の念を起すべからず起らば中途より帰るべし

一　馬かごに乗る事なかれ一枝の枯杖を己が痩脚と思ふべし

一　好て酒を飲べからず饗応によりて固辞がたくとも微醺にして止べし乱に及ばずの禁あり祭祀の戒にも酔を用る事をにくむ酒の遠ざくるの訓あり慎むべし

一　俳諧業代をとらんとする人あれ

一　他の短を挙て己が長を顕すなかれ

世を渡りてあやまつ能おのれを省る
べし

一主ある物ハ一枚一草たりとも妄人
ちりひ山川江沢にも主ありぞかし
知れよや

一山川田畑志かしく境又ハ新き
年私の名を付る事なかれ

一一字の師恩たりとも忘するなかれ
しれ一句の理をさとさる人の恩
をあるこを恥るべ人に教る八己を
なしてほのかなし

一衣一飯の恩をもおろそかにおもふ
べからずさりとて又媚諂ふことを
なかれ邪のこゝろの人ハ其の恩を
戒を入るれハ此その人ニよる
危し

一多を思ひ旦を知まへし旦ある
の好物を云ふハ好やさる事
邪の人に勢を與ることなかれ
志なくすれハ讒をうるるハ空

を無分にして歩合ありとも商ふ
危かれ
右の條々家門の於所ハ滋地大きに
商村せんするに此の掟を守て於
御する雖客一人も於し不お
に美を餝り利欲の為に法を云
て無をうる法中しうれや
或ハ古人の名を売自己の指手
此方にかゝるいひなしハ謀事
羊の頭をかけて狗肉を売乃
流にして切売の切者と云べし

一蓬莱にはまりや伊勢海老の役　蒲
蒲系門より来る来への文に此有言
くの深ほうゆいのか後るやうと
家来云或又ハ古代の役にも阿られ
伊勢を得るハえ月の式のことゆ
あらぬに非代をとひ如く得る
出入やとそ狙非のかや胸中
をさるいふしすふとしても得れ

とて翁云てにはの吟の沙汰なり
くるらんは今日行のかなしくしまた
陳くさをおもひわく意趣和
尚の絹に依り初の一字を添し
清浄のうるはしきを芭蕉に
對して強ひさるなりとぞ
一 かなといふ紀の松尾花より発して翁
伏見の西岸寺の任口より其角に
まで八代にかけて誹諧まで留伝
発句を見て留の身にを悟らせと
いへハ句切近れハとてこそ伝るべし
呂丸去留の号ハ其角に翁伝り
又おもハ其三の句といふ発句と
されしなるハやなと来云共との
無為偶して発句とする也とす
るし其三句集に渡るとしも
業に渡りすん八才二年にかけ
ん翁末て回其角去来に残され
理隆之家に只其角の跳に
てなきしろかなしのみぞとぞ

一 哉といふかなといふ紀の松尾花より跳
ねて翁曰方寸のうちよりなし
いはるゝ哉みやすの入れに詞
とみえて心しのなれのむすびに哉
只眼前の景をとやせられけり
一 哉人悦のかなし哉ふるは切字家よ
り哉其角に辞す其角句を
名をあらはす翁曰家八切字の
事のこゝを説くて故に好手也
ふでをとるの法法を案して
作しる句に行れば只眼前の
実ス景画き家をとも及す毛
離これる為にて紀元にて哉
句をなす工をなしむる物也
慮と切字八家これをしれ
とぞ
一 ゆくえ哉をしれ人に云けるは
翁曰尚句に辞に近れハ難波より
家やきもこの事をなし人に
とらへ法にいふ其得るや去来云尚

白ら霧兆あく　朦朧として
春を惜むに便り有へし殊に今
日の上に侍ると申し翁曰しかり古人
も此国の春を愛する事をさ〳〵
都におとらさるを去来此一言心に
徹し行年を近江に居給はゞいか
てか此感ましまさん行春を丹波
にいまさハ本より此情うかふまし
風光の人を感動せしむる事
真なるかなとや翁曰汝ハ去来ともに風
雅を語る人なりと殊更に悦
ひ給ひけり

一　此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角
猿蓑撰の時此句を書おくりて下を
冬の月霜の月と置わつらひ侍る
よし聞ゆ然るに初ハ文字つまりて
に執筆はやまりて柴の戸と
讀り翁曰いつれにても冬霜に煩ふへき
句にもあらすとて冬の月に定め
入集せらる其後大津より翁の

文に柴の戸にあらす此木戸なりかゝる
秀逸ハ一句も大切なれハたとへ出板に及ふ
とも改むへしとなり凡兆云
柴の戸此木戸さして勝劣なし去来云
此月を柴の戸によせて見れハ尋常の
氣色也是を城門にうつして見侍れハ
其風情あはれに物すこく言ハかりなし
角か冬霜に煩ひたるもことハりなり
理りとかや

一　うらやましおもひ切時猫の恋　越人
翁此句を伊賀より去来か方へ越人出勝て
云俳情有ると此一句ハ足りぬへしと云
とかしかれ共風雅に至て本性を
知りかたしと是より先に越人の名
四方にきこへ人のもてはやす發句あまた
し然とも爰に出て新く本性を
顕しハすとも賞ひけるとかや

一　木からしに二日の月の吹ちるか　荷兮
木からしの地にもおとさぬ時雨哉　去来
去来云二日月と云吹ちるといひたる

白か難あたらす湖水朦朧として
春を惜むに便り有へし殊ニ今
日の上ニ侍ると申翁曰しかり古人
も此國ニ春を愛する事をさく
都ニおとらさる物を去来曰此一言心ニ
徹す行歳近江ニゐ給はゝいか
てか此感ましまさん行春丹波ニ
ゐまさハ本より此情うかふまし
風光の人を感動せしむる事
真なる哉と申翁曰汝ハ去来共ニ風
雅を語るへき者也と殊更ニ悦
給ひけり

一　此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿蓑撰の時此句を書おくり下を冬
の月霜の月と置煩ひ侍る
よし聞ゆ然るに初ハ文字つまりて
柴の戸と讀り翁曰角か冬霜ニ煩ふ
句ニもあらすとて冬の月と定め
入集せらる其後大津より翁の
文ニ柴の戸ニあらす此木戸也かゝる秀
逸ハ一句も大切なれハたとへ出板ニ及ふ
ともいそき改むへしと也去来曰柴
此木戸柴の戸させる勝劣なし去来
此月を柴の戸ニ置て見れハ尋常の
景色也此を城門ニうつして見れハ其
風情の寂寥たる物凄き事いふはかり
なし其角か冬霜ニ煩ひけるも尤
と聞り

一　うつくまる薬の下の寒さ哉　丈艸

[illegible]
[illegible]
[illegible]

さる所にて予か句にあきまいらせ候
と先は脇を予か句は二日月とあれは
まて脇をつけよと云て脇を除いたるを
若し此の句ハ何を以脇とせよとなれは
只ての全体の上の句に以下脇をすへてこそ
其脇たるやうに仕立の字をやしなひて直
申されけれハ此中に誠に茂みて
一 第三の事は第三ハ発句脇の心を放ち伊賀
脇句を得て四句伊賀の作者誠に
新らしき事を作して古来にも替りけるとも
又草子伊賀の句に秘事に此句へよ
にもあれともまた何にも句の法など
あしけれと承ん
起こるよき所に長しき事の道理伊賀
第三の所にて見れハ句の目法
らしき事のものや皆の道下法
一 添しきの其作を何る全体の十句
これハ其光る物の法を物みを付て迄
仕立てし時の心も神の句ハ日本と
あり脇四句ある句ハ今後を付く

付る事の名目は多くある句かしの
とて脇第三と付る事なれとも後撰集
拾の時分ハ皆付句にて今の新す
真にて入るましくあるまし
一 平句構の名は本ハ部云 平句
揚の揚の時分に平句ハ揚の句を
揚る事ハ平句よと向ふて入事す
へ此揚句の時分を以てよ
古来こ何の一の作ときさかしの
其るとも取とかゝるのも句を以て揚
有し揚句の後てしまよおいて
も一句も新たの句をも見ゆる
て入ハ其句ん揚るの心ある人ハし
とも揚句これを隨に付る
一 其の其時雨を第三の揚句は其人
揚句を得て四季句ハ第三を
されハ其の句に何の付人の句
次に第三てとこの其いハ又第
みかる句る句を時雨も揚句
に揚りてる其に月影も

さる故くり事の句に是にてすまされ
と見ゆ前句に事の句ハ二日月と云もの
まて作者の名目を除ハ宗匠を
右し然る句ハ何を以作りたるとも
只く此全体のよは句と只此すてと
云ふさるまての字やしとて直
其人の付しめハ此まて落さぬ也
一 喜ふことよ是貌の抜る花の花　伊賀 荻子
前の句を得て田作の先老師さ
此る句を作して花ありしとも

朔日と置てかやの發句となす
處し其上かまはぬ也と見へ侍
代千引のけく哉と也とあれし侍る
而心なく由来譯あるべし如何
と嘆は譯是なまおほくは季
の出すところ是尾を出すへし
とあり

一 振落や下生る直す年の雑十年
十年之此句ハ千両の句也[illegible]
後すふ家に古鳥帽子俳諧[illegible]
あらはす京都ハ下心得をなす
ありや〳〵は却しやの教へなる
あしと今の俳諧を並て俳諧の見
は前田氏文字に心を出て是は
俳諧の人の芸やあるべし十分の
人とも振落まて嫌悪あるべしと
申されしとそ

一 田のものや八重代はゆく是年
此句申は前の誹哉としん凡兆の
句と継ての俳の時んはや云哉

見ゆる新しき陰にて十年之年を
偲ひゆく世代光閑の氏の名を
望ぬるとも許ゆるし前田氏より
相ハ京ひろふん専伊賀の逆中の
句は是に似たるほりそれを真さ
此句とかさんとて須て万年の句と
称り侍る

一 大年をおもへは年のかくれかな　凡兆
元の五文字亦すへてなくとも事くなか
句とせ十年之此發句季めし俳諧
雑撰と置くし花を謳人の思ひを
切て年来の神ても遊びの古人
句を落してめつを中ち字の俳
人ともみ山神の作まへともいへ
やと身命の是に及し撰と置く
却ての数とあるも満ちぬな
ふまん俳諧探ん完す思ての発
撰る前田是くの八俳諧の知るま
ゆる人とも外の俊凡兆大年を詩
とす前田中ると此一句ち年乃

胡粉を置てかやの發るとなす
色し其上かさらしぬ名を君の
代に到のけく紫旦とよれし传ふ
故に紫く白毒藤あるし世の爲
言臥に蕨を変ふ於いくハ筆
頃の心すとこに尾を延へし人
となり

一 振袖や下よりの直下より言の難言来
言来之代爲ハ手の白て不更紡るく
後す逐多ふ古鳥帽子飛台ホ
者之色こえり京扇ハ下に徹さす
阿さやしやにかしやの衣々る
本しと今の宗将を並て何ひ其

殺されしくせ栗さるものか(?)と尖噯
ひしなひける

一 夜詣も用意のある花の森 去来

前句花の森といふなれは名所なる
にや古人も夜の杜と社中の晴れ云
紫を詞にして詠る趣向と云へき
にこそ

一 月きや弥生ようなはみえ候へ 武人

猿こゝの撰の時去来云頃日伊丹の句に
添侍るとはしれと付てまや許哉
と云句を武人か句入集せよと侍らん
前句月さえとあるは何も一句なき
ら究りて悲の夜哉の侍りと見え
説とは其れやと云事をるゝは格なり
取るきれと許りの俳諧を以て
趣向を立俳名を以句をかざり
侍れはむ吉意得へし文なる
て折もあらんとも

一 きしれさる文は嵐の巻の結 其角

去来師に對して其角は嵐に後ゑ
つて侍る事への品翁の噂付さることを
読の新は云乱さんと云時旦なるかれは
定家の心ありさしても好まる成
ともしくいふつる俳ると覚えし
詳なる手段なり

一 さとつひそ阿の露そうたさる 去来

これは猿らの二三年以前の吟之前
句成句を其人々まつ一両年まつへし
とて後牡丹の焼く芳野の部し
すひしきより去来への文に論を
よし野を花の山と云此はこれは
しとえるゝ芳野にに説をゝる
説又は其角かさくゝるさあぬと云
しに案をとられて芳野よ句
とおうて此をとつひへ阿の山に
えめと自ら吟し侍ると 去来
云其後此巻句を得る人もまうけ
其より今一両年をまちへしといい
ふてかぢひけんの事は夏まて志る
さるゝなりとも

一　点者此執筆にて撰集の翁
泉郎か示ふ示かりけるとなり
撰集の撰の時此うち一句入集すへしと
ありし其点者へさしけるとあれと
も小難を申しといふ句のかけり
を新しく申すとて点返さるゝ
宗匠未小えひの句へ改らしとて
もとの句を案しえられ時に事に
もとの点者へ拝見しても其趣
句みていへるに文を案し付んと
論し論する句をしてこゝにて入集
すへ後翁日点者を小えひ事かく
同しとくに論しけるやと叱ひ
きゝるとそ

一　岩くらやてるひとつ月の宗匠の
翁庵の時宗匠四季へ此句と月
の様とすへしとや申れと申へ家
の事ならぬんとやいふてのや
翁日様と作るまて四此句をい
良甚ひく他きるや宗匠屈よ

寂しく山路をけおもしろくも岩に
よ文ひとり発句を見付ける事也
同しき事をひとり月の句とおの其を
気のつかさるんいはくはくの風体
亦ゆめ只自然の句と唐さへし常
に余り案して発句の小文よき入
るとまん十日未之事を趣向へ移二
三句まで付る作んある時の宗匠を以入
れへおもひ移る所の意も生る退て
考るまこの自然の句とすあれ、移る
の挨拶らぬそ新しめ此句無よす
さるこ十倍よりやすく化成る
心を察してかの発句の小文へ師の
自然の集に名を出していますを
かん草稿すまて遠化すべし
かの若やけるは事か発句併句ら
集まて入付るやと伺ふ時田宗門人
発句の小文集へ入句こゝまて加ふるも
のへ才れあらん故色るのことを聞る
とぞ申り

一　庖丁式秘密之儀にて四條家并
泉部なとの家にて口伝いたし
樣々の格の附式うち一向入集すへしと
所ゝん非之庖丁ハさらさる事なれと
も小鯉をやすらいとて白のかけり
ろ新しく出まとに表を進めるの事
古来より小えひの句ハ珍らしとせと
も之物を喰しえる付る事に候
もかん庖丁へ格言くも出来す
くかしていえてお支を喰し付んと
論し作ておるとよこひて入集
すて後萬回庖丁を小えひある

一　うつくする字此下の言をいふ文章
前後の庭床に入るゝ叙他の句
とするめて今日より前の句
あり一字の物語を加へて次
さるまじの此ともおなく作りれ
と只此一句のゝ文字如来され
置と言に書来云所る附べきる
情くるり動かす作るぬ典を發
宗を擬るの豊かと是は作らんや
と此附すくおもひ知りけり

一　下座や君つむ上は秋の句　几兆
此句初手附かし前をはし名ん
いろしと是作て此附に極めあふ
几兆アと首ていまさ藤花す前
回几兆ぬ手招て此附を置べし
まゝ手ごろ是は何ゝへ本二段
縦縦をゑへるらんと云て本来云此
三文字の上をて云作くき名前
是とひふ不るやしとへいふその
名作らんゆる他門の人早作らん

片扱ひてしかれども附置てし給
よしと重ねるもの八文字を云をことを
うしろなんと云ひ侍るとも

一　あの声は家にゆく方や明月　古来
此句を捌ぬ予前書きなく吟して古言
くを言ひ古来おもひはやまりて
謂といふとも誰か作る秋のところ
の字を知らいさるやと志のし
のよしを予作れは前田をおすし
ろふなふは古人をよく志れはいつ
好みとて此人より山下入鹿の諾
咲なくる萩の上露と云ふ秋わり
動急後の上下を大に好すまく
かけり化しくるを悦び自由此
上下只君字の字をと化さん
八文字に捌けなへし一句おもし
ろか新は志れなく業しぬれと
とられ詮なからんしとして古来
手段おほくに此句は都合よ
つきづをとりつる性大方の和

かの風景までもいとしき趣あるこそ
をしられてこそ
一 古来云莟の花の如くとやらん後を
つゝまれたる尾張の人の句に莟の花
の前書に一節晴やらぬ吹の人ありと
といふ句を浮ぶ句を浮べ申候曰
発句ハ翁のごとく腸を申して云出す
ものにあらねどころ又考例に云て大
平樂都しりて発句とこゝものを
知りたるとは頭ものかたりあて古来云
前ハ句対も宗匠に出あり　りや
依て浮句もあしくおかすれ候
よりいとやすき事にぞことし
一 下郎に往ぬくまけりや京橋
前句上手で古来に存て曰は
其角が集に此句あり　いふ云ひく
入集しけんとし古来云京橋の
十分に咲たる形容よく云得を
さる奴行ずや前句の深きを
付る句古来こゝにおいて肝に銘

するといへり始て発句を案ずる人ことと
なるやしたとて残念ありとぞ
一 をさなきの中に落けり織月　古来
魯町によみて時の句と前句にはし
きといふはいるは功者にて只いひ
やすきうつしこと古来云いさぎよき
しても事よきを句の上にていやは
あてる船たる然れどもいやまさ十分に
あらそれ之心中に一物持れと
句の上に入取れずとこゆいえるゆゑ
云ふまで句あらさること
一 泥亀や萬代水に睡りけり　史邦
猿らの根千古来深て睡りてひと
出入より前句睡りてひとりとは
形容風流指示之深に睡りけり
して憧憬ありと見ゆ肝要の
けしきを深やまると筆の花の
これいかに句をあらはしのあるぞ
ふれ付る案あると撰ばれあし
くるべきり

前の句象にていかにしても拙なきと
申されしとぞ
一　去来云　其角の桜の句をとかく論を
にすれども尾張の人の句に其角の桜
の発句に一節晴やかにして吹の入るる
といふ句之内に記するを誇る事由
発句は新のごとく軽くやすらかに云事す
ものに侍れど之を尭考卿に学びて大
平懐節し神を発句といふものを
知得ると記頭ものかくいるる去来云
事は其時も宗匠に学び寄し　なるや

一 しはらくにみれハ涼しき家宴
猿らの揺の射宗次今一句の入集
を願ひて悉句作し侍れと云よ
句形し一夕稿の例に侍りける年
いさくりけるよすへ香も師あんと
宮の御ゆるしは志くらくにを
れハ涼しく侍るとやれれハ稿日
これこの發句そこそ今の句
に化く入集をさせよかし

一 玉桐のおくあつしや秋の虫 来
はしめハ侍のあおろにゆくの案
と云句之此時古来深出
案る射そ雅ハ中すらことくと
ゆらん玉桐のれくなつかしく
覚侍るよしをやおくる汝君
に玉案なとの意味あらし此句に
てハ古み年歳中へくん深に玉
桐のおくありうしやと侍るを
何とも句にあさへるやと拝し
まひ之文字知らされハ下線

けやきく秋の虫と直ハ句にあるへしと
形り古来あるにかく直ちに句に移る
るりそうし彼深く思ひ波ら却て心を
く詞志つり或ハ心たりらあらん花ま
へ神仙の幽玄の覚悟あつまりこけや
きく直らく無るへく侍らんこれ則欲
のかとへしあるへきや

一 もすゝみ流宗あおもして鶴り古来
古来初学の時發句の结構を詞
ひらる稲田發句ハつかく作意
たし余能生へしとも試に此句
を読してくのうひされハ文也
にそも形しと大かたひしとあひす

一 涼しみ或子供のひけや麦あ労力
礼能云此麦をさけハ麻扇中もふ
れん古来云麦麻に生て遣
ふう尺と編すも稲田又あるあれね
の編かしきし学用れりと割し
まひかりつくる人家ふきとよ
いうかしや沖の射句の古帆に帆古来

古来之説ニ今ハ新風のはしめく
附句ハ此集の奥附あらたに此句を
そえまうし侍ると也あや行帆ニ
うけく一附句とをとさいそうしやも
表帆もえ本ニ説て句のはしめ
よく心の附てありあからん前句沖
此附句といふも又一句つゝそれよし
されとも句ハたとへの様若侍りもと

一 兄弟の五十韻合せすやほとき古来
古来之説句ト元月廿八日の歌あ古
兄弟の五十韻ニ兄弟合をとれる此附る
それとも宗けんのしむるし光源氏
のむかし雨の形端ニたとすとまひ
しを紫式部の思ひやれるお
むかしをかりて一句を作りる前
句ハ藤原とハ定へあるから一句
いやしき深きを此廿八角の源ニ同
おりしを源川より源しまふ
係為之説句ハ心得かりて詞より
此古来之心得かりて詞さらにと

いそんハ悉りはりぶのひ保此まるとし
文字之今の俳諧ハさまくかけて地
定められハ是亦ハ今志の中の人し
と存すに候ひけり

一 まつと形日本むかふ横き
まことなる松より花の咲くほれ古来
古来之和ハすの流りをむ又人の家
を付前りつと付侍る付あり
此の花のさきおのしけれされど
又前句を先さく此句を付直す前
句ハのまゝおひて附直し侍るや
古来之形をやの去年ニ様也
よろしを兄て初よ付侍れと
よく兄るは此形やの古語義
けしよきはりれ是をのし
て其後あるへしと思ひのへて
付直し侍るとや前句初の句ゑ
ら人三十棒あるへし将のけされ
を直すへしとて今のまゝよ
きなりけり

古来之様子ハ新風のはしめく
附句ハ武葉の奥目あるよ式句志
そまる事ひ侍るやうなるや行帆よ
うけさく一附句とんいそうしやと
表帆もとのよ読て句のはしめ
よく心の孫そうおかゝん前句沖
此附句といふも又一つしるよし
されとも句ハたくくのよ若侍るとも

一 守武良乃合せやほとき武古来
古来之式目ハ五月廿八日の歌首吾
守武の五年よ哉乃合そとそる此附句

一　梅さくすゝめの枝の百舌で　玄峯
これハ峯旦の梅也翁深川にて
此句を見て梅ハ二月の季也と云来
いたり只ハ混て峯旦の梅を用
ひらるゝとなれん

一　舟よりも西風の音　表裏の句之
待夜試より点を乞たる時此句ハ
老をさのけより玄峯師に何ふに
翁曰しくハ季帳しきる句まらひ
待る迄かハ季帳とて又人々に此
翁かきゑて上京の時玄峯向く
立花る師翁よる帳よ待ちや
翁曰舟の中よそてまの派なり
立へし西風のまゝく難しつえ
さる事あるとなん

一　弓張の角さしむすぶ月の空　玄峯
玄峯問云此句も季帳あるや
翁曰季帳あるべきも角を弓
張といひて大一句のせん

一　てりちる[illegible]　元兆
そしめハ[illegible]之元兆の庭の中か
名なりて翁曰き[illegible]して下されと百韻
とかくも二句まで入か[illegible]一句おくても
よろしくん元兆まで何しくとひ

一　まてつきて此身を離る　玄峯
翁いはく[illegible]とらえて嫁る翁曰玄峯
我[illegible]これを[illegible]や[illegible]句
八[illegible]の[illegible]同じ[illegible]して
も[illegible]のやよく

一　けんとぬけゐる池の蓮の花
咲なよかまはす稀のかくふきそ　翁
ひある句[illegible]付玄峯[illegible]句を
のみ[illegible]と翁此付句
を[illegible]けまハかく付なむ

一　くろうて[illegible]根の木は森
咲をまちひきれ門を[illegible]　翁
此句[illegible]付玄峯[illegible]
根の木の[illegible]黄色
を[illegible]を付るも[illegible]
[illegible]しと他の付句を乞れハ

一　梅干すくめの夜のころも　去来
これハ峯旦の旅之節深川にて
申さく日比梅ハ二月の言之去来
いひ出し是ひ混て峯旦の旅に用
ひ侍るとなん
一　舟に乗り船中西風の吹　去抵の句之
旅六試方息を乞くる射込むなり
先をかけたる去来評のはしめに
翁曰くこハ手帳らしき句なるし
作る句ハ木帳之どこ人の作
翁かきをて上京の時去来問く
去る句何茂ように作にて侍るや
翁曰舟の中にてその作なり
去へし西風の句ハ能くしえ
たるなれとなん
一　弓張の角さし入す月の窓　去来
去来思ふ此句ハ初ハ後に人の窓や
翁曰く是ハ后の句にて角さし弓
張もいふ大一句の作なり
一　てりちる荷なをきはしつる　凡兆

付て人をも見ひろう

一　終の旅にたちつる日の秋
注しもちいさまてしちもあま　去来
ひおる白出て中申さるく付隠くも
はり翁曰よま上﨟の躰なるべし
とても来これをみてやうてはる
を付侍りける好春に上﨟の躰
とあるに下に句訪て貞門の
流派殊様なりしと思へす

一　かりのよるれしそめ秋風虫の
中見えし申きうらく房紙を　去来
正秀亭の君こゝけめま竹格子
新もすえる月過てと付侍り
けるを翁評八翁正しき見ひけり
其我翁去来と夜よ此勝亭に
宿す翁曰も秋そしめて正秀亭
に会す故むなれハ発句ハ亦まか
るへしと兄て見恨すへきるにも
手上発句と乞ハ其枝をそへ
ハ我早し和すべきと一歌の席と
いくはくも活う故に発句は時をうり
さびて常の會にもしらん阿すも是
風雅の道にて不興に句も成るべき発句
を如何ぞ正秀の急探を賦す二ツ干
まろてとまけしまつの新色あるを
秋の比やの限る寸二句まるゝ発句
のけしまを操し流末殊のまなれりと
歎すうしめくましひけり去来に其
時に自新よるのめし立る山入て
とし上句侍りけるを只月のさやけ
さまをいくんとのくなつくて位を
よすれ侍るとやまき翁曰まる其
さハかくくの好かるん此故の様
新の粧をつこひきんでをふへし
とし

一　分か外しよ夢をたのくるを　去来
浮草生すよおりみけつて茶結翁
翁歌より雅彼を重くの文よ此句を出
知しは重の化さへ中さ此甘味をそえ
而我人を之随分雅をそえうし給

付たるをよしとす

一 後の杯かはしつる日の親
泣しもちいさき子もちもある宇来
此句出て中々そらく付けくるを
此翁曰まゝ上臈の姿あるべし
ともすこし来これを片てやうしける
を付たりける 好春云上臈の姿
とみのさうでに向かふさう宣門の
説法師猶宗師なりと決す

一 京のはあはれしきの秋風寒
中ゑんしまきうへく風寒く 玄来
京真亭の弐之には めでた竹操子
新中をうる月空て付ける
此を翁評八符正しとよしとす
其取翁玄来と伝に無類真亭に
尤す翁曰そ秋をしめて正真亭
に命す此字なれば岩句は家筆
ろんしとなえて先賢すべまきりを
其上若句と云ハ其句の指ををそえ
ハ後早しる事へまるとと一秋の体と

ありしとも

一 名月の木がらしやかゝんこの月　十来
んやひくんや月の名とすへるをか発
て木がらしや此かんこ日は月とへる名
日は句八発句をよく合せてるるなと
知りるへり

一 きらの月よ見の月は発句　名
身町の此句をあけ十来こいふ方哥
子供と遊ひてとは此八子供の業
ともろえるへしおひて取合すへく
うしれ棒客を踏破て多くへしむき
名此句を評りしよ平其發端
す名回く我を悦んまの他を残人
のことを見ひしよ果して無りとて
誹史の標題なりしとそ

一 橘のそれ赤ふきて何の花ぞれ　格芸
十来こ様能活ゝ今の有大なる此れ
此り皆木八句とへ入てれ此例近花
の手の春はれ其活ゝ能能をそこひ
よそむ中に戻ゝるは貸人のやよ

アすくめて残陰よきかりしと治む
て哉八枚は木よすとしと成の政も
ようかとるを賞します又他は八
前先をしすかかよ化すへしと
言ひ又此路のそくしれ作範をうん
あとのくさひてるを知りましひ
名作は引りけてみつのこれ
集の音作よ依る書よしあきし
此方を評すへかくうるとく
の雨の句をとまらし是ひて
句程の句遊びとしのふとの押接
アハられ急抑をしるしとそえ
しり

一 卯七の發句よ切字を入るよ八
め句十来みなのりは名回此切
字を多やこ十来こハまさ修接
病しは乃先恨し待る名
回め句十来こねとハ一本末の
方しとのへとも将極を明白
八枚のあらし夫れりとの人とも

ゐられしとそ
一 新鉢の未通やわからん二八の月　十来
んやひらんや月の物をふるをふかす故
て未だや出らん二八月とて新
日は自ハ気用をよく合せてる自と
勝りおへり
一 そこの皇未の陰茎能く玉　新
鉢町なれ自然目に十来之ぶ女より
子供を遊ひてとはれハ子供の業
とおもえるへし志ひそ理会すへく
うしれ揩写を踏破て知へしもとし
新は自を得りの女に平甚穢物
すう新日く茎を悦んすの池と執人
のことそひしに果して然りとそ
球史の揩娘あうしとそ
一 橘のそ扨赤心をしてはのふハ扨　陰茎
十来之陰茎頭の今の陰大なるとは扨
あり洪ホ八自と入人くれ出んは近花
の手の玉陰茎頭の絶此をそらひ
たよすのそまふするは貨人のやうよ

あすらめて陰陰よさなりしと浪お
て然ハ枚れ未にすくしと陰の吸て
くりあとゑを賞しおふ又陰此ハ
新先を以をおふに化すへしと
宣ひ又は浮のさし陰緩頭らん
あとのまもひてわをおやまひ
家汐は年引るけてみつのゝれ
柒の亲地よ作る書よよさし

全くは梢相なる句ハ切字乃
あるなくしは発句の證之論
曰然り古人の説ともまた我を知
ざる者の見を惑しむべし　切
字のことハ遠俳とも誤く秘す
ることは深くこは越て世ニ家
ごとに多しといへとも秘すべしと
あるしハ先のことあれハ其事ハ志
たるく遠慮し侍る方一切字
をへたハ句をきる為に切字を
字を以きるに及ハ中ニ句あき
れるきれさるをしらざる作者の
ゝ兎角先達切字の数を定らる
此定字を入る時ハ十七八字の
つゞき切るゝ故二三句ハ入て切る
句又入すしてきれる句あり此為に
貯やハに合のや此しハ之もの也に
てきれ此或ハ是ハ三段切これを
何切れとゝ名目して侍るなり
扨又文草に向ひ曰　其故ハ三十

一字にてきれ発句ハ十七字にて
きる文字撰入る之又或人之問曰
切字ニ用る時ハ四十八字ミな切
字也用ひさる時ハ一字も切字
ならずと見えハ是れ心を志れと
慎子一事を盡すべし
一卯七云桜ゝのに花を桜に替る
ことハ如何　去来云此時に至ば
桜に換んと云ハ曰古人の如く其来
云先よりの花ハ桜に限りしたとい
へ一通りハさることにして花毎
其の出花ともにそれやうある
ことなる花やその形りとの事より
而してに見え也ハ咲花をのみ
すしと思ひ侍る也曰されバ
古ハ四季のうち一季に桜之沙ら
云ゝ又も哉あまに侍らはとも
かくも作すべしされと花之の
桜にそハ其りる冷あるしんも
平常さくら眼一を以て咲によら

今ろは梢梢はる句ハ切字乃
よ安よりは發句の體之篇
曰然るに志くの體ともまハ侯を知
らるゝ者の先を修撰すへし切
字のうちハ連俳ともに深く秘す
ることにて伝ふることは趣向に家
〳〵と多くしといへども秘すへしと
あるハ先のことあれハ其事ハ志
たゝく連歌し伝ふる中一切字
をかるハ句をきる為に切さるを
字よいきるに及ハいやすこと句よつき
れるきれさるをしきる作者の
ことん先連切字の数を定らる
此定字をかる則ハ十よ七八ハ安の
つよう切るゝ跡二三句ハ入て切さる
句又入すしてきれる句なる此故よ
是やハに合のやいしいるゝ事のしに
てきれ此或ハ先ハ三段切これを
仮切なとゝ名付して修撰すよ
さとり又文草よ向ひ海曰発句ハ三十

とかく是れハ句前すこしあらくと云
ならひなり

一 卯七曰 蕉門にて恋を一句に
ても捨るハ如何 去来云 此事を
うたかふ人多し 古ハ恋の句数
すくなし 勅撰二句以上五句とあり
これ礼式の法也 一句にて捨さるハ
大切の恋句に挨拶なからんハ本意
なし 一説に恋ハ陰陽和合の句
なれハ一句にて捨へからすとも又
いへり 先師曰 大切にするより一
句にても捨るといふも大切にするより
出たり 先師の流ハ古来一句出
れハ付句の後は恋を去りけれ
ハ挨拶もなく又五十韻百韻に
一句も恋句なきハ一巻とハいひ
かたしとおもふとすかくしかく大切
にする恋句故悪句多く出来る
二句一所に出れハ辛とし却て
共悪句になれり又多くハ悪句なり

句なりけれハ一座不如其家
あり出来に恋を付て付けるものん附ハ
二句三句もすへて付のさいはん
附合ひて付んとも一句にても捨
よといへり 翁ハ中ニ依テ其面
のよく恋句も渡し初よとあれハ
恋も和の上を翁ハ只おそれすこ
よ付られしとも又ハ達者とかとて
俳諧の上にも句しねハ古書にも
あしれ恋なりとも是れ古人の恋
人すると中々のれは只好学
の作しおもしろきを思ひ作る
のミ

一 卯七云 蕉門に雪を月に用ひ
候や 去来云 此有り 洒堂云 漱
川の会に雪月の句如此ハ如何
雪字も句中に用ゆれハ不用
月の句さんハ拙なると直す
月に用ひさせる句二句に月を捨
させんとも句と月次の月の字

をのこすことなり

一 披講之本式の會にハ名をも歌書
とあれ當世も発声を誦する翁曰座
を歌書とも云正月ハ詠進あるゆ
ゑに本来ものとハ各いふなれ退て
思ふ所ハ元のまゝに在なるらん
一句に歌書あれとも既に座
と唱ハ歌書ならんか中にえとも
たくひにはしれぬと不審とす

一 翁曰並上の俳諧の文とみゆるなり
或ハ漢文を仮名に和らけ或ハ
和書の文字に濁音を入と樂
阿しく聴しくもひなし或ハ人情
をいふとも今日のさまにおくもと
捨りもとも西鶴の俳諧のしくみなる
姿阿の流の文章ハ和らかに拾
えをも文字ハたとへ濁音をかゝる
ともあるまゝにいひつけゝる歌
俳の上にもおかしきものし
こともなく

一 翁曰漢名所の發句ハ其讃をも
変の句となんゆゑ按ずるに作名し
西行の讃を定家の後ゟも出
所々の發句を松翁も用ひ
侍らんハ拙きとすべしとぞ

一 翁曰俳名ハ何れも熟字によれ
只唱へ清く調ひ字形の風流なる
を用ひべし短冊など出て狂文名
阿りや名出候よろしく字形
ハ表しるべし手代ハ後名乎
出て我自便なりとぞ又册形を
とけしめ風似とこけるを紙双
の行る字ハ名に用ひべからず
翁の册形と云ハ紙を二つ折にして本来
外題の寸法阿り竪ハ表紙の三分
二をとり横ハ其分一をとりて持るを
やうん猿蓑の時阿の書ひなる性
にや見えたり
魯町云此植る日名古来より季
にやと本云是慥を元阿の句に

をのつからとゝのへり
一 坐坡之東武の舎にあそびし歌仙
とをんじ常に言を稽古す翁曰
を歌仙ともいへは正月ハ非詠あるを
とし古来とかくといへれ退て
おもふ事もあるへきのさまにはかるらん
一句に歌仙あるへくとも既に至
と唯ハ歌仙形ちん中元と云
たくひにはうれひを不害とも
一 翁曰世上の俳諧の文を見るに
或ハ漢文を仮名に和らけ或ハ
和歌の文字に漢音を入レ雑
はなはた賤しくまたひかれ或ハ人情
をいふとても今日のさかしきにおくれ
捨りもしは西鶴か浮世めしくなれる
我門の風流の文章ハおのつから
言葉文字ハたとへ漢音をまじゆる
ともやさしくいひつけるに歌
俳の上にあるまじきとも宮のしく
云へしとそ

て知らぬ人待つ古来の季なれども
季に悪しくまじ物なし。ならば用
ゐし。師曰季寄の一も捨しさへん
を将要やよまし嫌らしと承り侍る
の教も古来の季寄らしく候と
いへとも正月梅は春なれハ夏季に
定て可有るに此法侍る也
一 古来之続猿蓑集の撰ハやゝそう
俳諧集のうちにて殊すへし将
ひらし雪集の鉄立を見て此余
と物すひまかの法かくさぞ
集め出の後にありて高出の中
にたすとや出かへ。師曰俳諧
出の名ハ和哥詩文史孫抄集
とちらひ俳言なくしとありさ
もハ元此の名付ゆゑを見るまし
みふし和来之日月日記などの日に
さへ猿子の蓑の松原笈の小文
これそのおもむき浪化集の
村の破海とかみ山と号す師曰

これ和哥式にあらハ仮にゆくへし
浪化集とハ申へし
一 翁曰午日上に宗因なくハ我らか
俳諧今に此貞徳の涎をねふるへし。宗
因ハ我その中興開山なりと云へり
一 翁曰今の俳諧ハ月次に連を付て席
に臨て八分先を以吐へし。仍て席
する事ハ作とし
一 古来之法は門人に事なるを面拝
あれし故ハ又に分そうなるて給
りし事をへたる事にいふ事ハ
さのこゝ念を入るものにくし。此又一句
八ちつく俳意なくしてハ紙たへしと云
ん兆か一句偉に十七字之一字もあろ
そらにて季入て此俳諧とさする
和哥の一體なり一句に志あるま
やうに作すへしと
一 翁曰発句ハ取すりそうてくと土下
しまるを上ふと此翁酒堂に
語て曰発句ハ汝らかとく物二三尺

て初くえ句ゟ古来の季寄に作とも
季に然るへき物阿しハえらひ用
扁し此四季寄の一も捨しさらん
を将舞年よふ賜さと承り姫紀
の取も古来の季寄らしられと
いへとも正月晦日ゟ暮れハ夏季に
定て一の曲ゟ句に此将し侍るとぞ
一 古來之俳諧集の趣摭ハやゝえう
俳諧集のうちにて絶すへし将
何ら歌集の秩立を見て此二家
と有すひまかの法かし芋を

其る物よ得らはいとまさをのくさ
るゝことくなるへし
一 脇と云ハ發句へ気合をとるの之前句
これ仔とも付よするハいうるを人々
しらはやしき
一 七々未之脇句句よ句哉とひふる
文ハ文哉浮よ浮哉付りたとへ
ハふりふりとく小掾きふるとし
句をおへくるて小掾言ふ降と
他れハ句哉付りとくも七々来つて
と楽浮ありつゝ合うことに脇句古人
もあいも物やおまかんとへいえ
すやとく
一 前句發句ハ当るよりさもしかれ
ア付れと付句ハ之変文よ止れり
むしハ付おをとるとす中にて
心付と云とす今ハくつの響聲
位を以付るをよしとす杜牟に
いはるを響聲秘とハいへるや
七々未之文考ホはしめしを去

出せる光をまよぶくるとくれ
たいひくしたる也脇の話をは
けて語る絶ハ押て知へし
赤人の名ハ流れる秋すき 史邦
名もきひつる合点あるへし 七来
脇句うつとるみあひとる中ある
とれを手中之十棒をまよくれ
るるまるしあつと悦ひすひけ
まを支よおまへハ母得ひとつ子を
うつとしをも川よる句他の得
やけしくのきとのつぬとのさるひ
あれハ冷暖自和の時ありてハ
きらし明むるとみる中しばる
まし赤人の名もおもしろやと
得らハ名もきひつる事る哉
思うともかれ人未を名きつを
取るつと云るよう合点ある
見しとハおくつりゆく変味ひ
ハへるへし響音ハあハひくるなし
細には

くれ縁よ題ち多き了ちく了紀
身ほそゝまち力れ友寺とゝる
附ぬるを付けく数々とて古のよ
ませ出惣をおつけたれ手こそ
大力よそうかくる去所をして
深う吉ひろ一句し給まむき
のかそるとあれハ京深よ来むしか
さゞ京文看破さしる事し
一 半庇よ寺らく内よ六本杉了
いのちられしお摂葉のさゞる
秘ハ和歌の奥儀ハしらぬひと付
くる翁曰歌を分り雑同事を
の境界とみへさうよしされと
直よ西行と付んハまつこと共傍
一 まて付へしとて都をまして月ゆめ
昔人のはしめよて世る路荒山
一 肉親族うとよみ寺う八係
翁曰いうさ手深そう付あるんとと
一 翁曰宇色ハいう深とつけてよし
天象地形人事草木虫魚禽獣

の遊へる形容うれけしきあるとこ
一 翁曰附物して付うこと当付無沢とこ
とも附物して付のくうんときり
ちうと付さうんハ文字揃あるへし
とそ
一 翁曰一色おもそうる翁中て一躰
あうんハ見者しるへしとも
一 花やや去経まかしうとつお金と業
翁曰さひと能付ハうと荒怪ひけとこ
一 うれ京の飛号あうんやみの門よ集
翁曰句の経よの清のあうんとこ
一 名うとまし翁めくみるう金経明後道
翁曰附るをきみ付しと深しきけ
とく
一 翁近化の手法门をかの時世彼向
てゝ庭紙やそう今のことく紀し詠う
んや翁曰夫深うく今の風あるへし
五七年もさハ文一変付うんとと
一 文章うもゝ京雑お古付と深くまうけ
まいとうや翁曰京のとハ末まと

よりこれをしらせたる時は年々
に其事を表し又は作りし長歌の短
歌なるをは源氏物語をうつし然る
を古今集に短歌なりと書く
俗には長歌なりし附の目録の長
歌古今集にても皆長歌なる長歌
なりとしるしより俗人難して不決
事は後来出雲の俤にて短歌也と
出せるらんとおもふ短歌は萬葉
集にまさるられ三十一字之長歌
といふ也凡に上古の歌八
皆ていふ長歌の体裁之すれ等
三十一字の体ある是を短歌也
ハ反歌と出て其外の歌までの
てり悉の名ハ長歌ハ只他所一首
或八二首と書く長歌といふを
いへとも既に三十一字のを短歌と
いふまハ緒も皆ま長歌くたとへ長
歌其名目作りても歌毎に長歌
しとん出へり流中にも長歌と

と八萬葉集の名目とおもわる
三代集以後代々の撰集も三十
一字のを短歌と不書と同し
うるし古の歌八これ長歌之俗
の歌八短歌之唐に古詩今体を
いふかとし貫之八いそのかみ之
いんを短歌の記と出て詞も
まハ長歌とうるんなるを紙
出んや轄ひあきら魯魚之乎
誤りをそろてんとするより
静く紛しき説を付る俗
俳諧作者八ひとり長歌を短歌
三十一字を長歌と定めくり
を論究鑿用ふなるらん
一正式四くの歌人皆も古今三代
集を祖述するゆを志る然も
とも手添する歌は三代集を学
ふ其にも似ぬといふもそのまや
弟同歌もそんなのかしらん流志れ
ときもその人の宗歌をおもふよ

定家ゝ隆を信ずること貫之躬
恒よりもすくれたるなるへんか
一正風の古今集にまさりしれぬ
むそ呉ある一集にて比三代集
撰す一集一代の家にかゝりしのます
俳諧なるや翁曰貫之の好る
ことはとりくるかゆしれたるを
その人ハきらふべきを嘗ハきら
ハすとみくるもろこしの詩よ
もたり指の俳諧なるにやいつそや
丈草の杜評に杜子美にある
きられ俳諧をよく詩人の子鑑
とゆうんの詩にわれくるゆを
て其詩もゆつれとますれさう
一本節問中比の家人ハ詩よるや翁
曰西行と連歌の古大家なれん
一末流の古今集ハ人て流布するも
正本あるや翁曰定家卿筆比
本ハ正本なりとゆうその本ハ
定家卿の添削多かるんお

一或人問古今集の序に六義を説
季吟抄註ニ六義を述の
義註れたりや翁曰和歌の義
ハ詩のあるを和歌の義とする
之ハ詩寄一般の理あれハなあれ
とも今まゝ六義経緯比説に
ちゝ流季季吟に此ことを申す
季吟に是を述る為の儀と
せし手の流意書に季吟の意を
評りし流意書ニ俳家ありとも
悲ずへきものん六義をとられ捨
おかりとおもハへり風雅頌の内
に賦比興ハ詩の理これ捨お
まて是をなくさとるつとも引
歌これ義によるのへりとこの素
より貫之の家によハこれを編
ともあるのと六義の興拾も貫之
の其てりとのへり比興捨てた
本文を六義にたゝへりき似たり
とこ定る説あるまゝをあへし

かゝる歌和歌もぬけより引はなさる
と甚しくしるして風雅の二ハ
歌すかたハえまけらくこのえんし
一 素堂云今の人歌をよむに發句
誹とて俳をえらぶことをよむ人
ハ發句ハ詩の三百篇のごとし
誹諧の体裁おのつからかくのごとし
古今の誹諧は詩経の体又修る
るもまたし其後に芭蕉翁
ひとくして体を廃せんやこれ等の
作とくるれバ出して發句誹諧の
よろしかるハ時世の風俗をしるべし
とやいはん古今集ハその体にして
すれバ其時の風俗もとるり
此体ならんとす人に發句ハ
其格を定めてしるべし裁のごと
體をとしく相みへまたこれにも
といはん芭蕉曰乱さきハ其まゝにて
俗に入の境なりんと言此一言
を味ふべし

一 卯七にとふ上京の比
先師にも逢むとて淡海の浦
翁の大津におはしけるに時々人を
よせんとけしめ評判にて人を待
ちぎれに評判云翁もとハ去来
よしけるハやむけらぬるへし
と去来に見せしさまの翁よ
りきんとこえて大津にて先丈
草にみえもしれよとえて安き
うかひの侍れともとこえて人の
ゆかおさしらあるへしとて其日
翁にみえてやせて此時日よく
知来たりけるとし浦の里
とせ六翁人の心に徹すへし扇
衣のゆるきを負し作らハ袴に
も心を付て扇をさして見す
と言しかるくなりけること
又深の蔭種の底其集にも作らん
と此の發句まで翁の一生を動に
裁ちんとのおしに翁曰その花

らんとて心をとゞむることなし　昔ハ撰
集にのりたる発句をよみし人にかぎり
俳諧ハ是を縁に定めたり
一 正風の俳諧の書を見るに非俳諧文として
芭蕉ひでんや翁曰家俳諧文をとくに
さるをかし文の縁ハ俳人にある書はあり
此人皆の文を見るにしておなく
文を見るく俳諧文とおもへりおよそ
何れも流家ハ深く疑ひ依りて絶ず
俳諧文とおもへり
一 芸日翁幻住庵にして随自文章
に對して俳諧の物語とこそ實
側に在るハ先を守るに一事たるく
まこ意を含むと其世俗談る恐不
まのりても事を文章に向文字
云事何ぞハ今俳の俳諧に何流
様の俳諧之正秀何様の俳諧と只
め何文章云山ハ只青山雲ハ只
白雲を此後ハ変よ筆に尽きた
云り

一 發句の深き心ハ季節の不易にされたるを
とくしく知らしめ俳諧の始めなり
たしかの附方ハさす月秋に絵の付
所をしるし古人のたとへ竹林を描
て琴春を好むよく情ハ心ある
花を見る事の月を見る
為しハ風流のたちまちなるを
くらをまなへし
一 式ハ古式なり倣へ
一 其の季節ハ古書を見るへし
一 古池の句意を心して家句を
人に説ハ家秘なれば人にいふ
べし
一 俳席ハ一座の時宜にかなふを
見てよく考へ何分うん翁曰見て
何よ書とて分別し儒仏より出
たるかも浄瑠璃なとも見るへし
一 俳門と交りて若しき流をやすし
うし流ありて何しきものハ様変を
ぬすみ入るへし

右七ヶ條ハ必殺と前の問答なり
一 虚実の俳諧と連歌と心いかなるや
前句付人もせんにて無分別ちくのひぬ
ることく連歌ハやさしく前句上下
となり一句として調ひたるを以て頭
とするを以て作るぬる辞の字義と
俳諧ハ俚言を戯る寄の変化して
今日無体の上よして前俳諧を忘
を用る事又ハひとしく流れをも
以て一体とす字義をまつ俳ふへし
俳ハ中古の俳諧よひとしく連歌を
離めて言葉のひを易く其心
連歌ハ前句を残さず理をさ
へ一物よこそて更に離れ其中も
うしの俳諧も大のく其情をさらう
作しく利口をかへ前句俳諧を
前句の心を取く添ゆるをよりなど
一句の上物よ感合す物の情を探
理を取くさひまきりまとへしせんの
うるけし此稿の楽並の如くなる

の光をそへやしなひ侍りしたハ又
連歌も上手ハ前句に寄はし是
船つなくいつの泊ぞ八波の上
海ハ千尋のそこまでもしまた
と付たるハ上下よみつけたるんや
前句を上の句下の句よ付るなる
りそれひきるをもて連歌とす
ほのひほとする黒のさひしき
次しの葉もれ日影さそふやも
とかくる八句篇俳諧付たるんか
秋よりのちも秋の花のいろ
俳諧ハぬ句ハすさまじき篇
とさるべき句の縁より流れて
留さへさる五句目ひとやせん
是れハ連俳のさかひの心のさかひ
其の俳諧の一体と知べし此事に
一通りハ形は作れと思ふ所
あり流前回連歌ハ奇よ仙れと
前ハ歌の如く流れ連歌ハ連歌
の趣を通して景の直白の方

右七ケ條ハ嗜と前の問答なり

一 惣而俳諧と連歌と心いかなるや
前句附人もんハ定ある所なくあらちくのひぬ
るところ連歌ハやさしく言葉上下
とあらち一句しく調ひたるを以題
とするを以を作るぬる辭の字義と
俳諧ハ俚言を以戯る詞の変化に
今日世俗の上にしてた俳諧を
を用るを本文としてもしろく作るをもを
以一讀とす字義をもて嗜ふべし
猶ハ中昔の俳諧よひとしく連歌を
雅めてきこしひを易く作其心
連歌ハ前句を救さ作る理をさ
へ物をとて更に離れ作中む
うしの俳諧も大のく此場をさう
作しく利口をかすと俳諧を
前句の心を和らく稀なるをそなる
一句の上物に感合す物の情を採
里和くさひ志をうるへし先作
うるけし此稿の條並の所に

のさまを一ぐさしく通りしたハ又
連歌も上さま八前句を寄ほしき
船つなぐいりの浦ハ波の上
浪ハ千尋の底をきし見
と付るハ上下よくつけあん乎
前あり上の句下の句よそ似たる
うそ此ひさるをもて連歌とす
ほくひほとふる里のきひき
次しの亭今日あさきやもや
と又る八句論俳諧付あんか
秋よりのち此秋の本のつろ
俳あしぬ身ハすさまじき嫌
とあるハ其句の所を以作言
好まるへきる面あ面ひとやせん
それハ連俳のさうひ心のむらひ於
その俳諧の一體と和へし世者
一通りハ彩の作れと更にあれ
あり此前句連歌ハ奇に似れと
前ハ歌の趣を作り連歌ハ連歌
の本意を作りて前句の本

とある句俳諧に縁すくなきものハ
発句の事とよみならべたるものの事と
よろしくてハ俳諧になるべき也又
非情や肉をも落しまの月
といへる句俳諧の発句と申侍る
俳諧に関しては仏とも何やらと
よむべき文字なく心のむすひ
あやしきわざとおもひ出れハ俳
諧なるべしとおもひ出れ
はまゝ句なるべし発句の骨とよ
ぶとの字義の云様に関しては
心のむすひ縁なくべし同じ句なる
る人ハ相やさしく好める俳
諧弱しといへり翁曰左附るん
俳諧の志をときすすめんハ手前
なるべからず作より俳諧にも
あれハ句の相をかるくも俳諧
なるべし俳諧とて附けは益
無俳の相のそこハ附るに能ぞ絶
弱よ仮そまゝ句俳諧を論を

もとよりて分明なるべし連歌士
の俳諧をして俳諧よくつり
きるハ連歌を家に持やらぬ
なるべし俳諧するものは
連歌に似よりたる句も俳諧
をおきさらむ句なるハ似もやらつ
為し似よりたる変おもひます
べし

なを制して立る帆もちう

と云句に

さしぬるに浪さ洗ふ次郎助

と付しは或人此句俳諧にもなし
さるゆゑの言葉やすくて連歌の
守りにて其心を用ゆるの要さる
や各詠詞に於て此付さると
いひしに然しハ連歌の言ハかり
用ひさるやと尋ぬる人の言ひ
為ぬべし発句ハ殊に物をかり
ねハ殊に限りて連俳を

花に吹風や松末に斧の音

と云る句俳諧に聞すべくきこゆハ
斧の音とよみたるをよきの事と
よそへたりハ俳諧になるべし又
餅搗や内とも表も差の月
といへる句俳諧の発句とすべき
俳諧に語しにちとも内やのと
よむべき文字にて此のもむと
ゑをうちそとおもひ出れハ俳
諧なるへしうちとおもひ出れ
ハ連歌なるべし其の斧とよ
めとの字義の言葉に語し此
心の変を続くべし向後にあ
る人ハ詞やさしく好むに俳
諧語しといへり翁回て語らん
俳諧の志をさしきすんハ歌
なるべし此物より俳諧にや
あれハ歌の詞をかるとも俳諧
なるべし俳諧とても語しけれ
無俳の詞のみにハ語し此無俳
語に依て連歌俳諧を論を

んは境ハ俳諧よりおこりたり連歌より
出るなりすへて句への心を味ひ見玉
へ去事を見て俳諧に趣く人なり
連歌者をもて俳諧にあそふ人なり
此二様を能く分て学ひ所志の論に
趣ひ玉ふへとし

一 伊丹の鬼貫ハ東武行の序とや
幻住庵に翁を訪ひて翁の見ん
とのむ様の木ものゝ句を見て其説を
夜に此句ありて作る人なるを
しとて

春の暮を桂の木もなりけ茶立　鬼貫

と作りし翁の先輩の服ありて
あれは事ことゝして西よ又本より（と
作に出山をりて二の其ちかうの
翁の句に

うすしと色をみんとる村もみち

といへる句に　鬼貫

下手も上手も深居して弥る

と付たるなり一句作の名わく深き

よき日よりさてる句作と句作ハむ
つかしねと此ハむつかしと翁曰只
其の風情をはしまけしれれと
言ひけるハ鬼貫

田を耕けてかゝる雀かな

と付たり翁曰句ハ句論の論まし
て稽を論んとするをひよけり一句
の上より理をとむる事いまた
れなりとうちれハ鬼貫

田をかりはけてかしすゝ雀かな

とさけるハ理ハうすく奔りて秋し
さうとこそいれと句論の端ひとし
又按しやむ人にえいよりは雲哉
京宮の見うつよりは秋もこゝ
孫のぬけるハ一かる揺こそ河し来れ
しけれと様ま人ハ鬼貫虚実に句を
ゆつりし其よ

よきの此御門も何てかり

と付ければ情を起しかる意味を
てひゝきをむすといへとる句にはやよ

味はひてそのうしの句はやうなからん
このうちの附合ハ此句より起り其ハ満
よりおこりなどけるよ満さりて正の
むかひあはしとのへども亦俳諧
らんときこゆるのへり文字あけら
くして
沛猶うよんと松風のごとく
稲田先何のなく之猶る一句
更にある句に取付ん松風の吹
あくや猶る一句の勝まてし松
風に環せすへしとて思貴再
吹してそはしめて俳諧せん事
其の場をかくりとて然んを
孔乃ち望日宮乃又其山して同
うすしと色を見んをる
むかし紅葉之志のある沛猶くの
よんと松風の吹とつゝもあま
附あ更に笑ひきこゆるまて
よしとするところ無ての教お
お遠あらんから稲田ぞゆるそのよ

しとのべそれ教への趣ぞゆる
よしとして前句を再ひ見るハ歌を
とりてあらんぞゆゑのよしとハ
前句の魂を探りてそれを附る
心する句の風情ぞすへてある人
の意をほとりして聲の笑ひぬよ
ハ誠にさることとアとむきてそ
れを下にかへり志のあるまことの
浅里園亭つまくの寿仙
独をそふ蘇の中氏蟻の寿つ編
とこゝ句下
まこれを人のさかきハ注 墨圖
と付る此句の句にさるよしや翁よ
因在りしに稲田なる前句にかへり
に仔に其に感合すへし独をそふ
蘇の中氏蟻ハ何あるそれまへし
其心をとくむする眼力前不と付さ
る先明慈を何ゝ守す句と前句の
独をそふ蘇の蟻の前ハたゞを
あれハ更に句に然あし　於下

大嫌のちいけて持参をまつをてさへ
とき態を嫌ふこと風情を成すし
あるをまよとまし此処ニ一句立
する前の句の御情之歌ぶ無き
の心を付る挨拶之此句ニ
一石かみしかゝすれ米　清圓
と付る人態をまつれをもちひ
恋を人伝とふへてまつのすて大嫌の
火いけての一句をうんで時ハ無情之
そを指明る挨拶を你りし
それ人の情を以一石の米ニ添う
つれる身代之到る所無念ぶ
らゝさるを恋へし此味ある人を
深く感しあらゝさる人ハ此の時と
いふ為しさかさる人見る人の思
分かつ御指ちよみと初心の及
と云付ゝる人付さる所に見
ぬといふ之向前の句をそふ蘇の
娘の哀人ハ嫌ぶ是非をとえる
為しうすしとるを見せる

村さぬちハ縁をとむつかしく嫌ハ之
沢山中の余情ハ中ニ発まり
意あれ共御指ちよみと中まるを
ハられとむら恋の都しとおもふ則
いふは前句を心をのむとむら恋の深う
やよひまき合さる所も
ほめつて和合の妙ニ至る
とゝる也
是れ袖を揺て見せる袖ある人
といふは恋の人ある和合の毒成て揺
ることと嫌ハ此是は袖ち人
恋や是そのとゝする所見へくも
の眼力を見へしあれしと云
る所より直ニ流ニ伝ふるれて
浪人の心のしを恋の心替おもひ
とさゝ付る是袖の心の合
そこと浪人と云て此句ハ何とう
すへし扱き所ニ此句の人を
何つけて何を以句とせん無
味ひある也すべしとゝると見へ

そこら村の祭とハ秋もなかばされ
る山神の祭事ニして何を以心
ともしめんやうすしくと其
きこその湯あて実に念あるべきや
めき合せる御撥し御撥つよ氏とそこ死
くたらしきと対婦の男女し
き心をふやうつよむめのとさ
ると一旬よふくらるる御撥も
大名此との体を起成よしまま
合せてる野店の其ともみ人え
し両御撥つよふと云伝しんハ
御撥と云詞大名あらハおゝま女
とハかきる人つらハお側廻りの
うへ小姓の給仕を庭河ゆめさ
るとおろへて出るを女とつさ
ハひのまへ箱田御撥つよふと云伝つ
んハ女まへ大名もかきるへつらハ
あふ風情の仕ふ那る下女のかをと
もましとも云伝らん依て詞よふ

ものへおん女を使秘の縄心より出
て赤使秘の者あとぶ那るとも伐
あへしハ白何より故くや御撥の
色より出る生男子と感合すへ
うしハ一旬も皆ふくよきくれく
の女命衣の御撥しと云伝しん
ハ女ト工独くは其しらるへしハ
女まもや言まの人さしらぬつ
くる女子よ一折の縄の実よあるる人
それるへし本をそふ蘇の様の女
を苦求と名付るとしての人うさ
しとすへらハ一寸ちよ様りさる
故もおろし和合と云詞のめ
き入伝をとむるれうさるへし
故よしすしと色を名手ると云
撃よ心ともの八系る縄を授り
之手八赤使秘と云へるハ一手
深川まて
ゆうしくも降りる其発き
とらへて本

は艶なる花やかなる事を聲高く柳
と付るゆゑのしく降りたる雪ハ
花鳥風月進退相應の音律端成
業すべかれとたゞおもひよりて不
俳諧の一流がと見付て魂を
句のいきをうけて付べきる志
あるも一轉して一句ハ心とゝ中る力
作り立を郷音とよりよる付合
おぼえ人の會の読と云ふて
うる人し御様のよひとの其の風
ハナすしとならずしてある句ひ
をうけて句と成る作も轉じ句
も轉し志もおもかげをとゞめん
これを變付といへり其のほう
し和會の付をさへハ俳諧變化とも
ふ云るり俳諧ハ新を要として
作るべし同じもやすらかと
いうや箱田花ハ前句の趣向を
うけてかれはけしやまさゝずそ
新り變の氣の花の其を名目を

もて人に言はれし八句の付孔を知
らんとの名目を立てかきたるべし沢
名目は其論を立てしるす者其の外
葉目と云ひては俳諧にして八句を
へし作を述るに及へからん自然に
合せ八句面白く立つべし名目を
知る事なきは強ゐて他をも始を
出るとし此味ひハ来條に記すまゝ
及ぼし流句他の事ハ抽てうそさ
皆ぞすべし沢めすれ心じきく
其世間の事ものとこれらをさも
こ新へしやところ広く心を離ハ
しむや一轉る物事するの付を知
をなこむとの云ふ事るはいかく
心を通すべしする付のの志
作く様くちひさ云ふの其
心廣く大きくしすべて會席に
ても席にすべてする付と
見え不案内なきも
阿の趣の其の心とを

師ハ誰さんをよくみ給へとすゝめ
得しゆへ師の力ゆへしとれ大器之
物をつくる事ハ小事より学ひ始め
次第する事をしるべし先ハ心の持なれ
すしても學ひ其人耶やこゝろを人
にハ許りて上つてしば句作伝門の人
ま大切なる事のさせる流義とく
師ふ下し
一 此頃安問發句を見るにつめ集作る
とつくる此ろの執心なる人あまや
前田ら其界き役より當上は如
るは志しれんとまをきすれは
るゝ所より知る事も集とハ無
風雅の句をとえしひまぬ風雅を
言ひとなき志しするやうに無俳諧
撰集の作らし志あらんは貞
徳の手を人々の風雅ゆへりく
宗因やまて俳諧を興されや其
ときよしの俳諧ハ今はなくて
まへるとしりてまたと花をなれ勝手

物好きに讃んして今の日本
の日記し物好きの詠人ひき集
めて發句を数百作しれぞう
数ともほしいまゝに發句ハ見て出す
爲にも自在に案中にてまゝ
發句ハ多ふりして未だ明の所を
取捨しさ今の一變風とも云へし
とかくまゝずをとゝまるまじん
まなひて満足し師を求むへし
く師をとるも他にあれハとて孤座
押被下されたる人をひきられもとめ
なるよりそれなりもとをとも
其誰にゆづりそれハ調も学下
に存ゐるして後も貴にさま
内生中の修業ありそ撰集するを
悩みをはなれやむなし宗匠稀義
をんとえらひなりされと今の他
また集に知すへ無きもの可きを
さらしくせき志さんに至るいたるう
學けひ待らんは風雅の最初くの

瓜畠集作んとかすみ立帰さ
手慰に作して身をうりぬる集
に綴しんとおもひ侍りて先達
平仮名撰集の表作りかれ
三四韻也すへしと淺やすく
中星侍れと発句ハ二百餘ものる
しまのは浮との小冊なるへしハ
一ツ集ハ其風雅と撰者の心す
合點するをよしとす第壱を
はしめ廿一代集の附母の倭禀
よみ侍ける風雅之更古今
新古今し代々の風雅を
称する法にて御撰なるハ宗
御説のさへやしまきに宗
いふとく集とハ云へし是又
家の物もかりよいふと同れ
俳諧とても同様なるへし然に
貞室の玉海集のことを紀氏
の史の文りくる書砂の遊り
しるす雑学雅の集め書人の

句ともしひ集めされハとて家々
む一體撰されハ何を以風雅を先
とすへき集作れりとも其の種
あらは此我作り撰下しゆへ
貞室を俳諧の宗ととなへし人
の上を以発句二三子に示せし所
志ハ撰者を見能分別あれ
しそこれをよしとこれを何と
云庵きんや晁田と人の世々に
て同し位の句をよしとおもへるも
あらん是なりとおもへる句ハよ
うろくありよりぬとおもふ句
よみへし上手の句ハ心のとか
ぬ衣よりしぬ持へし得と論く
幸號ほ佛のかきうつしひ集め
て句ともをあつめへくるとそいふて
集ともいへきん承好み其の集ハ
俳家の俳諧の一體の姿あるく
承心を意をこる句ハ句ものも
をん曉那集よ貞室宗周示

のうちそのせざるハ当家の俳諧の
体なれバ也新しきハ俳諧の便なき
ならんやう文盲愚昧の者もやく
になれて自己に俳諧を志れやすと
おもふものも多く如来作らん
先師の在日あれバ何とのすへ
きん外の人ハとも他の人を誘しむ
るハ何しれ当家の俳諧を読ん
かく究めしと口をそらつしぬふを
あられと懇に諭すのみ

一 今様百の風体に給仕し修行
同宗の集をえらるへきハ名を顕
俳諧様々の名人およや又俳諧の
たすけになるへきに俳書ハいつまでも
よろしかるへきと前田何をきよ
ろしかるへしその当家の俳諧に
まとめえらるゝ又ハまことむとも
東ホの語をはすゝそんとも
えらんにも古ハ古の名人の句
集を其かなしく名によみさる

人相しき時代しの風を考へき
風を当相手にして名によみゝるを
又くらう支右に一家をたつる
古人の語を守りておによみさる
人をいうまでも死ぬまで生涯
家名よくする人もしと定め
我家の俳諧を学んとおもはゞ
俳諧も相すへからず初心より
上達まで当家文ハ抱持ホん
つまゝの当らとをつんでまし
て家の風をそらしあれバむ句
何をこのむへし

一 季吟の当時俳書とされけ
る八雲集を用ゐさせしか
今宵浅見卿のえらびはひ
るものとハみ人ハ多くハそ
人々の家の集を持ちまを
集めるものと見ゆしくは是と
世にある者の中にも句にハ俳書
をとらせをすゝめよく利をえる

と乗ける物くろまかきてかゆふ

一 一笑の伝ハ金澤の人にてまた俳諧は化天
ほかにも翁は明日の約ありをなし

附

秀句を嫁のちゝとふさと記されれ
とやさひて一笑二十歳にしてに
翁は道者の仲の上のことを惜みて悲み
の織とかく悲しみに物涙の塚ハ茲に
て見送りをひて
やゝそ弟なをまさしく此時の葛
と一句の哀をいつくしも此時のことを
ろ又金澤にて北枝と秋の坊といふ
更すゝむ中にも悼みる指はあり袖を
の事ひ語れおのつから中にも
やゝまきそ候ては翁かねてより御
の付合にて持たれて杖を休めて
ひ北枝おとろも對面ありたる坊の
中にとのはけ止ハ此と北枝よりの秋
の坊へおもむく甚尤も喜ばれしく
て秋の坊はさを修行してなお翁の

やとりへきのやまて對面をさとけれ
ともに北枝か告さるとと我甚
悦ひみくみく北枝秋の坊為に
あつさ翁もみとも口寄しける
序は其もを務は此北枝とハ
一向まのいそてきけるを翁も
ゆるひまひそ坊か為に系を添
ゑひけるとそ

一 牧童ハ北枝か兄にして才能を
はしその俳文同じ趣の作あれ
ひとかたならぬ堂の人のかたを
ともに見まねまゐる事を深く
ある様翁は酒席をまふけ候
翁の門に入く翁も牧童を好ま
もの有りとはれたまひしおのと
ある生涯能を全てえもの
すゝめになむむ芭蕉の翁
にすゝて武の本意かけき懐紙
業は業を風情色てこりんとなる
れ物待よおのふら翁曰此句は

並と前に語へるのよしと云
なへりき外ハ何のもの覚えたると云
んやき
一 翁曽良退居の時少秋の案内
にて野田山末と云所まて遊ひける
ついきの茶店ニ少秋かやつかれを
やすらはせる茶の前ニと翁ニ語り
きけるに翁それを聞しめひて
笑ひてとなく其しも是ハ手に余
秋の句なり
翁ニそのかやつかれ子を写ひける
かやうの兵術も又一格なるへく
申されし
一 尼智月ハ江州大津の乙州か母そ
母子ともに風雅に遊ひて翁を
師とし給ふ時翁ニ対面の席ニ
て故郷を翁の前ニ於ゐて云ニ
弟子となる人未熟にて結して
とかれけまた翁られつゝおかしく
六十にちかき人に弟子をゆるされて

いとかなしく弟子にせん事を思ひとゞまりけるや
と戯れ興しおもひしとなり
一 句空ハ金城卯辰山に住して髪を
柳陰軒と云蕉門に深切の風士也
始翁の門人となりてより心深く
翁を念して三拝すなりすそれ
師の恩をわすれさるものの殊人
といはれし翁も感く思ひて
みまかりし義仲寺にて此辞寂
の像を句空へ寄せらる其の画讃して
秋の色ぬかみそつほもなかりけり 翁
と人称されぬ此句ハ無好の住居して
世ニ妻を持人ハ浮世の妄思を
もちひ持く糠味噌瓶ですらなし
ますのとさる空をさゆく秋風吹
当く草木零落の時にあたり
天地一点の塵埃なき外数の
身の安楽しを述ふへきもの
なりしまとて此柳陰軒にハ
翁翁の像をとゝめおもひ[illegible]

まじくかへらじとおもふ

ちれ柳あるじも我も鐘をきく　翁

翁咲て庵の中より花ぬすびとは句を

ころ紀より俳諧を好みて十七歳

一 横貫ハ備前の岡山の産にして翁と

の時なりし

山寺や只みさくらの二三本　横貫

翁小宿卿の後京にて此句を

つくりてより其名世に知られけると

ゑ後翁集にも載て近代得らし

なきは此翁の竈説を歴る

句なりしと云り

一 蓮ふに三之縁並申の秋難波の酒

堂は江戸に来て深川芭蕉の俳諧

を翻す

素掛の提灯志免すね起

ほさしつる里川の橋　翁

翁回忌此の俳諧四五年の後を

大かたかへりてなりしとやされ

けり

一 鞍壺に小坊主のるや大根引　翁

此句六云此句大根引ハ歌にも読そ

大根引とハいふことを翁は出にて

出されしとそ

一 翁曰俳諧も常しきものハ誰なし

と見えをいやしめるハやすとまそ

日ハ俳をとりかへる八俳点という

てを守をかる事のも実と家

句の本しばしをせしハ此本式を

うしなふたとへば天空にて書に

人おさふるもの有り一人ハなく一

人ハ手を入時老ふる書

の才人ありし此大女の心をかくして

よそに髪をぬく文有る行るまで

女房の後へゆきしに又心をよ

よそく白髪をぬく心多きかは

私しく此俳諧になくてよし

或時去是より芭蕉翁に及

ひ本式をうしなふ事に作有り猪

これハ上手にも得られ有る

孔ハとても下手にも阿し汝只世式
をつくすれぬようにすれ孟子曰為
富不仁仁者不富と阿りし此理を
能く心得べし

一 貯すして置まよふなうり賤之人
なりけれ

一 人のためと吾為なりけれ

一 當門の人ハ米須三石六斗 皆
古ぼうらハ徳語上手にあふる為
なりけれ

一 然らず者の端より他阿ることを
おすすめべし

古四方藤桃翁の辞書と存す

一 翁文艸を書ひしは此頃此芝年
すみ学ひて人の上にはたらんと

一 月をたえへかんとも

一 翁曰句と身と一枚になりて案す
為しと許しおる

一 後六壬之禄五七月壬戌におさむ
く附翁の對面せんとをよろこふ

橘町より深川芭蕉庵を再興
して入すむ事も此年の冬数を経
す桃隣事らしく八月九日深川の
庵をたくしれ深川の契約の
そのめ之一座蓑笠桃隣淨求
法阿ら桃隣なとハ翁へ發句
楷書にべしといふまのやを桃隣
執筆して四五句読てはやす

七月十四日の夜名月堂ハ谷の
送り火をえて露をやす
新暑とふして越えり大井川
十無子も小粒になりぬ秋の風
名けふしれ阿ふ菊もれし螺の声
來後へいくら並よる徒の糸
此外もあり しあまれ
此に手ひて旧能井宇都の山武句
大まずの都事にその清水桟
の句もよしと撰箱笥よ
里も大井川の句ハ金村かしかあ
阿り身ぎらくん宿をかゝず再

篇咲のみし字数の山の句よく侍る
やと云人ハあらはとよしと言へり予
かまへしてこのをを不審なりお
もひすふや前田許子ハ惠克ま
對面し許ハさて此方惠克か門人
に對面しすやと言すふ予ハ云志
かしれ尚白に二枝對面しぬ許ハ
ひたすら嘆野猿蓑の二集に
眼をさらし貫秋句を撰ると
ひすみしおし撰ら句へと思ひ
ハ許より此の沙汰しおしのふ句大き
にお遠ざらしたるを撰られハ又
許の句似たる歌も知し蒼秋ハ猫
を詠て申しひらの山氏句をえ
らべ此句二十句えらべ仕遣二日桑
し旅く許必類年あらぬこそハ子
とを云却しうると蒼海回見ん
来たく尚白同音でいひし旨
許子此句をえらべ乃撰集
にて眼をさらしたるものなり

惠克か親を撰る事しれたる惠克か
魂を集めて撰る事なる人ハ門弟并他
門ども許子一人也蒼秋此親を門弟
にもなし他も通しかし惠克か句
中今日達者りと大きに悦ひ申ハ撰
集をこころざし許子か居士の人をやしと
返すへし撰しあくへの予不審を集つ
くし思ふに俳諧ハ此撰と云香
にのこと切く許か骨法に許子か俳諧
と晋子か俳諧と人前合せし惠克
か俳諧と許子か俳諧と人前合す
とさへ云ふ此所にて力をそへて懺悔
す事かなされハ其日對面のそしめ
より予か俳中大に遂へる此法一
にて信くおしかをそへる事なる
前に對面をさる此時の晋子か前へ
点を乞句百四五十句ほど予なりしと
思ふ句に点すれとして言辞の
句に磨其他の点ありして今時の盛
しうか句大いに一点の句ありし甚

宗因の後にありて盛んなりしは其角か
不審にて有る時の会に晋子
あり時宗因の持論かかれる
てハたのもしからぬ事ぞ桃青を
以て株と決定し給ふと又問て云
其角の桃青と晋子の桃青と符合
するとは如何の誹諧と云ふの
誹諧と符合しける旨を述て不審
をはらし玉へと申せしに師答て桃
青をすきたる付句あり
山井にこもる汲に絶するとも快
ひとり集桃青を崇奉りけるやと
宮人の善言ふ時も有なり
彼のごとし晋子が手ずから其所て
此事も詮なき所に桃青ハ絵をも
伝ふるにして惟然のかくさる本面
白きものとす故に其の中に遠
あり存ずる晋子を得て符合
せるを宮人が始て眼をとめ
まことに信て筋骨にて家蔵す

ことなし文句にて云ひと晋子が序
ハかけじのなきを遊ぶいひ立ると
いまん以回す事に宗派なき動て終
し晋子ゆ俳意を動かして第し
此事は其事流し又に符合すると
申されける文大には成す又問ていふ
様に用ふる宗匠の桃青の血脈に
侍るやといへば此不免許してその
多くの流儀を正しく待をそ
あるは別にと宮人に其は退き
す其後其が拾遺事哉でる付
時の難語に回る元禄に至りて對し
て其年の大命を受て宗匠
子のといふものさしけひ侍るると
又は此回れ東くの人に対して
俳諧の器をもむ極めて直
指のけをはする人ならむと思ふと
目にも雑集をも入ての
後を探らえる人は何々る
筆のあとも残るにと人あるに

さやしきこと思ハされハ強ひて
篇をまとむることを成止さるを
日の本ハ俳諧ましく多く年久
に雑んをかけるといへども篇を
勤さる人まれし是ハ句毛あた
まみにかへされハそれ人のさ
し篇のすくれたるものハ稀なり
れしくせるといへる許子か本
性をんたる和事かまとむる
愛に大かく心得て取しと言ふ
業をまとその事いへるし一に俳
しる人とこり取回答のすくれ
たるものを見す一万句是一にた大に
成ざに雑んの人許子ハ病会
をとりすれ財宝を顧にかへる
人と是二つ四十をとりすれ人る
れやうし三十七これ二つめとに
まず相にかへされハそを顧し
このし是四つ冥更勝りしく
和歌をに苦しめる人あし許子

西武にはやりけれども高慶乃
右に稀れは是にさ許子惜識にて何
らはとへども和漢の文字にとも
くれは玆頭らとまに人にあしは是二つ
あつはた六ッのもの採ひする人すれと
二つ三ッ八五つとへとも六の余奥是く
しるる人すれと手前よしといへとも
手前の何しきたるあしは速にはば
俳諧の底をぬのきんと言へる門弟
の中に底をしものいはし世
此時をえらさとへどもひとつに底
を入る是瓢ハ猿みのかに底あり
て古今を論しる底のぬけさるも
のハ新古の差あれしきのかの文
何すと添りして一日もこれを止
れと言へりその外の体是句
言菊の論も何りや大根
とする対酒書る句あり
辞や揖く秋は火のなり
と対を同しく終るは句を篇論

しそ回忌ゟ俳諧するもの此境に
よらて業するものなりと称し
すなはち六家々しくさての風を
学ぶ家に新古の境ハたしかに見
ざるべし此境あるより家々に業す
所ハなし然れども能句すれ者
をふけくとゆきハ此回忌恐るる
時のよろしきをつくと示しおへり
又回忌を俳諧ハ三哥仙に限る
さる人一生渡世の成就をする大事也
覚悟をよくとゆきされは予ハ此と
俳諧するに中全篇たりとも成就
する事二哥仙半分までさる
事二ツより四つ事此回忌者は
とおりて俳諧すると三四度も
此とそも備くと俳諧するハ
ふるうれまめに容易に思ふと
ふうれ古の俳諧を修る時ハ是れ
骨髄より油をしぼすべし
あまふかれと大に恩を示

されかるその正月より亡母の七年
追悼に至る心易ずまるもとめく
哥仙一巻程に成く此に習寸此足
を読く且恨ひ且稱寸予か三此の流
此哥仙の前に向ふハ予が俳諧程よな
らずを書るを何ゆゑと申せハ此回答
くされこうこひ侍るを示されと大
に驚きうちに亡月盛の日より卯月
三四日まで予か老に入て追悼しおふ
眉夜俳諧をきくそ附句回向の句更
らに句を下し笑んと言へるかしこ
みて三四句吐出すと云へとも此の志
に叶はぬ此日常時從門弟并他門も
平俳諧たしかなく是非上に唱し
打継ぎも行く望く志免くるの
こと是名人のおそろ不に何しぞ
沖子ら業する業も是と風雅の
あまた子らえ一そる藝能を家とすよ
名人ハ危ぶまる之に於て一俳諧狂かく
のごとし仕換しやすし死心何くすて

なる見下手の心にして上手の稽古
しける事なり寫案成り
まくや稽古きれどくる稽の面
といふ句合く仕損しの句となる風案
是に稽の仮面となるへしとおもふ
心なりしと序合これハ志ざしの
句と申すも名人功者上手も稽
古や功田多句なき事なれども中
にハ下手ハ大功すれどもしくは
句をすゝる句仕損の功不なし
て一句もよくなし中の事人と座
をさそふ事かやかきつて合ハ
探りあそうとも人とも心中仕損
すきしき心ゆくやすくして一句ハ
役く仕損する事を決定なり
時なり
人として堅者の稽やさるもよく
と云句々時にいひおすの学を学
て回青あるがくこれて俳諧の
底此句をそめけるが一字下に大

接するもの只功者とも一字なり
句をするもの死をあえさへ見
ず武句あまさるものに功ある成るを以て
とも血脈の亡しき亦よりもて学
一更云に字をよく付く人の及も
さるものを甚きくれなり
一 蕉門都云ハ云事てるものよろしからず
うくひすハやすしみやかきこのる
しとく
一 匠に堅くつくれ沢するみ芭蕉 子那
蕉門深みとい句人しよくいふなく
やすく置侍れとも是れハ大切なる
所を本意とする哉そ中し
此深きかくらん其門の事なる
手を移るをはしそ侍るあり深
きの情あれとも此の深みハ一句
一あるとおもしあへるも
一 許六云蕉門その本来其許の一字
ゆう事 滅後門葉の字ならべる
とハ完くもとも心の〇〇あるべし

とんよし十年ハ色〃の外と云へり
されバこの集附の底ハ其紀師中の
一字いとまうり
一 春ハ物すごく夕ハ淋し
一 夏ハ物涼く夕ハうすし
一 冬ハ物寂く夜ハ静る
一 春風ハ物和に寒し
一 秋風ハ身の寒し
一 夏ハ野ハ山涼し
一 冬ハ野ハ山淋し
一 春雨ハさうしさく静也
一 五月雨ハ淋つくさ静也
一 夕立ハさえさうまの
一 秋の雨ハ淋く静なるもの
一 霜ハ夜の光
一 氷ハ水の光
一 川音ハ昼静に秋さうさうし
一 海の音ハ昼さうさうとして秋静也
一 [illegible]つゝまて雨を知
一 [illegible]山なく風を知

一 木枯ハ野を分吹
一 冬の嵐ハ身に吹
一 淡雪ハ音なきものなるべし
一 翡翠ハ夜なきものなるべし
一 上弦ハ七日八日頃の月
一 下弦ハ廿二三日頃の月
一 清水ハ寺社に涌出て流るゝまでを清水と云
一 奉納ハ則寺社に納る事也
右廿五條芭蕉翁の口授と云
一 流通ハいろいろの風体人丸らを流行
[illegible]かうりし放逸の[illegible]脱
千人の将の下に[illegible]しく芭蕉
近江[illegible]の時その側にありし
[illegible]の[illegible]及ぶ幼きより
好みし[illegible]あれハとて一首を
[illegible]を[illegible]芭蕉に[illegible]
[illegible]して
[illegible]の中[illegible]は
[illegible]
芭蕉[illegible]して曰[illegible]君家につくし
し時[illegible]の[illegible]を[illegible]

炎暑のさまよいさゝかも乱しよ今は
旅泊の為しる給ふ游ひんて生涯此
たのしひとす伽弟子注てあらる
隠しと此竹のはそれひ添く
そより済通の名をはらかへり
述たる

一 其角ハ貞享五年九月十四日の
晩の夢に翁へ諸侍にと覚て
そら其ひかえさまより芸だた
特に種々つゝ我下さなる此の
松を見て詠けゆくや沖の舟し
きられ時雨おそくもやく舟底よ
むしやつまされハ社人五藤まて
筋さしおろすそゝ蔵ハむさゝ扉
御幣と云物をたてゝるやうなる
たるうえうしとさしおろすそう
うけまりて百ち本の木さる在を
社人多く見てとく出よとせめ
歩つ時よ其その事き一句つよ
うまつハ佛もめとつや

くはも乱客てさうと着ぞろま
おりしろく海る中そうし松の梢まて
千由井の底風吹てゝ波と共
とのまうしやうへみひかしく
松原のすまる式見寺ゟ時雨の
とや起され八社人ま伴免し新をそ
しもへし当宮よろしく錦さそ
やとうまつきぬとも来て夏さあらう
此れハ十五日の松源川の八幡宮す
請侍る布豈さ庵を詠てけりし
嵐見れ侍りと併ひけ是ハ秋まで
秋るはさよ家ハ昼中し花伐と
ゟされたうあやしひの葬いうま
され虚霊不昧なるとそきるとそ

一 其角ら翁小谷郷の佐更科の三
句をそとあいうことゝゟされた
俤や姨ひとり泣月の友
との一句我も人すま定ゟうとゟを
乱ハ翁申すとなきくりし一句入自六
うしひ添れともそ松の月の天心中

ある事文人此句をと申されけると語ひ
やされたり
一 其角之句の難陳ハ俳諧にてやま
見えまれおのゝ子を舞けのごとく
なとこゝ漕ぎてるにしてかつは
よろつ浮と定めれハ其子の気を
こゝろ泣ける此庭にてかゆる手や
みそうしのみてつゝ春の白毛をも吹
ふ人ハ鯨なる身をうけて気魂さ
しめられてくみなるほとさき酒
ともに化して心の発動をなすおほれども
一句すゝめひとゝしてのあたはすると
やまされけるハ落花江そまて
うかまずをつゝみて抜さてあり
とのみ
　齢ら子ある乳ハ母に乳をのむ
と付されとも三才図会の説れを
見てやうしてきのを一句の意気に
も及ばざるなり附句に楼文例の
よろしきをそのよひぬべし　尾張

まで
　寒ささ吹きけゆく小家守けて
ところを付合とうれるれハ熟田の意
のうちに感ありふりし事まで人々の
心も非ざる所かしまけひてそれ
俳諧のまぬ之れ付合ハ春の月と
いふ句の仙そひらき侍り
一 車庸之句曰俳諧も詞ふかくのまゝに
てすまつうのへるとゝくしと言ひ
しとも
一 朱拙之句曰俳諧ハ手話の新しく
をおかすして何ふうち古人此を
ともに用ひすと示されしとなり
一 句ニとを熱田まで俳の根張さし
めく葉の中に堅み起俳子三節よ
ひつき手すとなく
　葉のむさしそよぎ其の枝の句
を起俳子なりまて筆之句志人の
うしろむけろ自由の條よ
宗房句そ阿ふらん人のうしろつぶ　芭蕉

とかく解らぬ又貞徳宗鑑が式の
無徳な連歌子演を見るや作
を案ずるにを歌に如つかしの後や
と念みおひやらくかくひかりを
句を絶出

三翁は風雅の天工をうけんて心匠
を万家に伝へ汝々汝に起んも
の後の俳元を何ふ年ごんや

同苑の花や中もとの何を甚

一翁住る所さよ今歳とよ月を三
く長きを伝けおしきたるをいく後
末の如はる年やへくて浅はかる
哉く唄て四人万五十年とのくの系
二十五年を八後案に前後へそるに
ことく

一史邦三翁何も附をひきる史子系
を八貧者の生き病くるに見をおめて
よりと年るに此等の花をなきらう
やと作る所に在りしに

上下や下を浅て此ぞそ　背屓史邦

先住人と比心を見て乱しける
のさる八信を以ものにむかふ掛中さ作
に夜すると思へ若やけるとや

一三翁の新蝶まで支考桃隣も墨
をくれ成る白雪向古事八ケとり
てひさく新しのやらん翁四何る
春の所

慕うつ移るゝれ比　稽　誥

拾遺八武運のつよき男哉

歎きの何しもかくの年く
なりめやし多くの年月稀にひかる
に果敢なみしまに五度と逮久四年
五月廿八日まで生のひめくをらし
かりのひしら見さへ形見となる句
また程もなし

一翁兆年告て曰一世のうち秀逸
の三五句もんば人は作者と十句に
及ぶ人は名人と

一諸大三匠の弟及び女子何某と
いふるものまさて尊と俳諧せんと

を望むまて付

旅人の扇にかける羽代の旅

ところ句をもし旅人の挨拶に扇を

よみ付けるとおもひて其の心たれ

ところ元合付して此句ハ旅に付

付けしまよまよ挨拶の仕様なりと

趣しおかし

一 付る言葉向發句に目立てさるす

ハ一座の取くやくも意見すへしよ

るやかりとそ

一 付る言葉向果且一句の外ハ意ゑ

るまあつと又向果且といふハえハ

此まくるゝ時のるもし大方果

且の句なそハたしと言へり

一 付る言ハとは月そ付けし果且

ひしまとて扇を招よせてとは

了予の案に西さは途端の彼年に

付る予は先陣て岩の某中の

生まりまて心の外

人前の沖まて付を呼やん　撫諧

嵐を舟をきしる　虎翁

予も深芭蕉庵へ参とかしたる

時此句をかたりあしおかまに予まそ

さてし此嵐の一字何かかさきる

何によみかん八先念の次第く動

さると大山のとしとかとを八波

起上りて回此嵐の一やまやとく

けなりて夏悉く満足かきくる

しけりとしめ八

次ナの嵐の舟きしるかと

と案しかる付句よみの字

有くきの字就して此信て作る

よへくり次ナの嵐と予して八首を

廻し付れとも一句途絶さきる

と言へり予るも芭次ナの嵐より

たるるよやまされる句備次ナ此

嵐を新しく出て付れとも舟

きしるあと云下の七文字後れ

よる上の七文字ま尾調ハ此嵐の

一字のつまみとて如く付るもの亦

しとやを八句もうれしく思へれ
あんこれ作とに成てくれる人あし
只手かはうつひ執を八時をつふ
しくる歌のみにて善悪の分ち
もなく餘の頭に疑ふくらすし
手歌此句しくる付一句のものと
まふよ求む連衆の死句らしとみとも
此句まて殺をあをよと月悔さし
と宣ひ給ふ

一 誹六言五文字の好しくる句人ある
來つて五文字を好むとらふと
季由ふ句あり
此句より亦たるけしきことに
句季入へしく五文字あり平句よ
有給ふ時子連歌舟やと云ふ文
字ハ極まらで此句門人ある人し
らぬこあり此時凡兆か句よ
雪つむ上の夜の雨と云句ハ五文
字を好む精を費しく案し
あくみて下京やと云五文字を極め

アヽと渡りて始て同し五文字をきめさ
せ給ふ宗匠よおゐても出さてと八ぬ
なる子細あるへしと云ひし其真退
て発句するに能舟と云ふ五文字に
兎合を物するに下京と云五文字
まて修の工夫の血脈を入へきなり

一 特に詠む句を時雨中されし八情に
首さし入ぬれは此句ハ新しと思ふ
時よとりて其の志めしなれハ一句よ
立するは修しぬれとも思ひ合する
こともあしとそ

一 特に風雅に句のおこ侍る
んや又風雅よして風雅ある
さかひよるへしやと尋給ふ事
前回まつのよ句の姿よまくりて
いそく句に詠しく修よ云これ
んるさも有へしされハ風雅く
と志まんよやをともよふく入る
心持くうしんるや俳諧たりとも
生涯のそのはよして詠めんとされ

まのたゝかひさかんにいたる夜の後
うやうんしくれ只ひらうつゝふきく
えしさまのこ彌猪つねわくてても
方法のそしつゝ出て覚るとし

一風雪あるを成氏の生きし日ハ門人
に對をしねく日ゝの風雅を
以故人のいくされし我名もま世
趣向俳意脱つまともするまるや
すし又家くらひきて語そゆく
情志をたのしむすむるの境を
示されたる志の方ゆく下し後無何
まのうあるくいふならねなさうしみ
まや探りもすへし我ハ只未熟
をおもふるをとぬる

一古書にむつしよう待者は名ある
人のしられ手跡よりわて識を
用ゐる之翁八十とおもふものゝ手
跡をそ多人示ゝ無比生ん事と
知るすまゝ代ゝ久しくあるべし此
時俳諧手跡をえるとえ中され

此人の願を待るや
名よめて形を隠るゝを書にもまし
それ者はきゝし人手かゝされ
此書傍心遍脱さゝ此の筆者の時
より者俳諧の自由にしとくれいやし
うれ心されるを上のるとし翁や
しゝ心されさるを下のるとすへく
翁口のおしへの俳諧書轉語ありさ
たれともすゝめやるへおまの入るを
おもひふ人のこゝろ此人をとに
言ひくれつて兄をましもとれ
気家うし其のとおもうのち甲六
ある旭よろう飛ぶを咲ける

一翁口書の猶ハ今く語述ぶ者あり
用ひしとる鳥ハ今く俳諧ひさゞ
これ等の浮葉をも見てなれとも
句ハ洞中俳諧行浮葉をも見ん
よゆのんとるゝ又俳諧く又翁句や
鄙のつくしたさしひのそとる昔
句よみその数日の作をれそらとる

然ハ心詞ともに俳諧なり其句を
うけて一その心にて言ひとりたる也
俳諧之詞にもあらんに有て外の連歌の
数に入るにはいへり俳する所一躰なり
なりとかへりしたとし
一古来より連歌俳諧ハともに風雅と
上下の差別ハ論すべき事にあらずに
すなはち俳諧ハ和歌の流にてあらす
然に花の風流ハ猶ほ論なく賞する
梅のほんと香をのみ賞でもおかしき
此比を見んと詠んで又ますます是も
古池に蛙とびこむ水の音といへる
しかるに俳諧させる中より種の
まつりひとつに俳諧を文体とす
見るに俳なりとも連歌を以て全く
るやうに成るは別俳諧の躰
ありて俳諧の式の中ハ連歌式
式よりして悉く此道の法則を
あり連歌の新式にもて追加と
もに二條良基攝政作之今

案ハ二條殿関白の作式三を一流とし
てこれハ肖柏の作として連歌にこれと
数あるに此ハ俳諧に四とし七句とも
のハ発句と成りよろつ俳諧あるハ
事を好く此法しかるを今案の追
加に淳和の法ありを大かたの俳
諧の法をむかしよりすると貞徳の
差合の書をおもにさまざまに
其事を云ハ翁作用しくゝりと
言へりこれ中に俳諧なきといへり
大かたよろしきと言ひ差合の中
もなくては調ひかたしと云芳
宗師の門に一書をあらはすと
中に此句甚怪むべき法を直
とこれハ宗匠にまかされとも范
のまと出るといへるハ宗匠ハこの法
立派して其名の行れ一代と
行はせ給へと人関ひされハ行
のおそれや法をしりて新に差
なれとハそのうきおほく差合の

又ハ対句なとにする事也是ハ大かたま
しくもあらし但志ある門弟ハ直
に尋ねて伝受して書留るものに
それゆゑ家門の法ともならさるなり
有しと云へり

一去嫌の事式目に前句ひとつより
二句去されハ用ひさるに其の句は
連の詞を遠く集め並へて詞をも
続け句ともみて心の連の様をおき
ハさるも今思ふにみな意あつて大
切のことくなす事に安らかなれそのみ
宗砌宗祇の法中にて一句にて止ること
係るまても有るハ此法不審門人
とも読して一句にて足ることとも
有らんとも又或説日前句連と
も意あしくは又月付て前句に
る付ハ必連の句を付く前句とも
ハ意中なきとも是にて大にハ
句のみにてつてつけ及へき
は新式にても此法にあるすし

去嫌とも意のあるハ今にて其心の
宗匠にまかすへしと

一旅の句或説書に前句遠方に旅
の句三句つき二句にて十句より多
くゆるすハ非旅旅躰意なき旅の句
旅にて有るとそあらし今旅並離
別なと又一句の此空にある旅体の句
ハたとひ四季にてすりとも心を旅に
しておほく旅を遠く只の川舟に棄心
旅の便りある心地となると
處しとハ去嫌の数ことなり

一前句東海道の一すちもしらぬ
人は新に見来なしと云なり

一前句本歌を用ること新式に云
新古今以来の作者を用ゐ今にて
とし八代集ハ古今後撰拾遺後
拾遺金葉詞花千載新古今之
新之後古門院勅撰続後撰
二代を加て十代集を本歌とす
る又堀川百首の作者までの歌

ゑ十代の前の集にあるともたとひ
集に入ぬ前なりとも作者の心味に
思ふべしと云べし
一 前句他の句よりしんある句に本句
等擬する心得しぬものし
よく其まひおく味へしすし本
句に隠る他の句付ハ必ず句
を引て趣向を表と表の句
付る句もよるへしとへつひた
うし大やうめのして思ひなさ
すゑへし古今の達者の思ひもそぬ
其まちらハ本もちと云者の句本
山風や枝をおくらん
とはつる句山風の枝を見を
おくるてあくちやすき術者
句同意の連歌と俳諧しはまよ
し付ハ又
寒古を八か年みとてもにおしきと
付まはそふくましるの世に
みやとつ八寸に真深はて見ぬとも

もみぢ葉しく志ら河の花
此前をと古より之を付るちつる
作者よりて前後の付さるゝと云ま
るときもさへし付に前句付のふ
の来卯月法花をまつく十月に夜ひ
志ら河に身ももみぢの葉しく志る
を見て前の意図は河の前を思
ひおしいよして前の妙所を落
付しうとかふ心よりよ見るを前
来るへし是まで前句能のうる
と云べし
一 前句切字のことむつしより用ひ来
る文字とも用へし連俳の発句
あしく付る中へ切字なくて八前
句の後に付る前付句の体なる切
字を加へても付句の後付る句付
中に切る句に付る前又切字の
くれもきれる句などの切字の
身一つを給八角然と志るされ八
私のべし能口伝付る師常にさ

を大切にして示されしと
此古文字も既にはじめの基
と云句をもしまひ切字を入ると然
楽しく法ゆ側に入りて此句ハ
切字なくてきるゝやうに作るを
手をハ廻回されとも切れ字ハた
しかに入るゝやうにし初心の人ハき
のまよひに離て悪しきと嫌ふ
為にてきたるゝ事なれバ其句
ハ句を言ひ止ても切とをなし
あむべしと示されし也
一文章のかゝり廻回廻名を文章
云々序に由序来序内序とい
三段の由ハ起るよしを云来ハ
先よりきたるのことを云内ハそこに
の肉なるのことを云三段を一つに
て序一つとも云跋ハ序とて
する也序有て跋の序も跋
もさりて同し跋ハ序を於
しく云るゝのことを云て

あしくするの心也序跋とも又卒
爾目をも云五字七字出ハ是等の格
なり七五三なとも此の類也手書
或ハ對語ある時は其對を置かるゝと
置時ハ古事の對なり山水を生
ホおのし對同あし詞出すもの
和に習ひなし得てハ千其やも
語るゝ也とし記ハその物を記する
心也擬ハ序跋に用し云の遠のく
題ハ茶平用し云のちくのふの次第
ハおもむの心にするなり山吹よる句
をするの時は山吹をあ先て賛を
山吹を磨美の張殊し愚かる文字
に出對四五字にして出たる類の格
なりと宜べり
一去來云談義の事ハ百韻を式とし
五十韻を仙之れ界の格と違ふ
の古式ハ表十句名残の裏を六句目
七句を花裏表に一せつて義乃
肉名不終一句にても清る迄也

ゑかくれなしといふ翁曰古は表十句の
付をやすく八句の后二句ゑらうすて哀
まさしむ物の執述をもちひてよさん
俳諧に八昔しうれ述懐に龍虎鬼
女さし好みる故表の内を嫌ふ俳諧
にも鬼女ハなりうらし龍虎ハ昔し
くれはなかなか人を殺すさるもゑそる
なりその類ハ用捨すへし百韻一面に
ゑへくしれとこと

一 古来恋の詞述懐の類は表にいふる
句ハ表の内ハいつて悟らんと思ふ翁
曰句によるへし文字ハくるしからぬハ
祝言にいひかなすとても人の上にいふ
ゑいよく述懐し花のさかりしきの
類ハ昔しうれくれきて理をさ
うるゝ名和たまく全くの意ハ詞を
称す句ハ翁拵すへし他人の句ハと
うむやすしとこと

一 古来恋無常をかきしハ古事
本説をも下心にして表にいふるゑ

さハ文他の物の上わかりわりさる
ものとの句の類いの悟らんと思ひし
に翁曰大かく八表にきらひあへし
事にもよる人まとものゝいひ生
ところも心嫌ひの詞に知らなして
心の下にきらふ句を捨てる八非
長清のうハ心きく所に一向すず
知らくいひてる方よろるへしされとも
表の体にはかりされハ必ずに昔し
うらハ古知をとらまに嫌ふハと
宜り

一 古来古今の人の名おほそにかす
とハのく悟らんと思ふに翁曰
今の人の名ハ憚むへし古人の名ハ
物によりて昔しより申しされ
ども無くて心きく用ひたるを
ゆるされたり

一 古来述懐に慈外くていかしく
昔より沙汰し来るなくそ付ハ
さるゝ事に好む心ハいかゝ事とや

さハ百韻の内ハ至て大切の事とあり
挨拶ニ意を用ゆべし神代より曰
かけしゆゑの掟と定めて能々稽古よ
るべく候也と

一 百韻を人ハ歌仙ハ三十六句之一章と
詠ミ詠る心形し得て初心の工夫ハ
只先人のよく心なれかし

一 百韻発句の事ハ一座の主の詠句ハ
神仏八幡大菩薩まつへし八雲御抄ニ
云ハ清浄の句を深く詠しく位
よろしきをすへしと也出やう云
付る古書云る翁ハ挨拶の発句か
ろしきを好れし時代による人
またの事や付らん文台本より新
宅の会ニ悦る祝う物と人の悔
追悼ニ人さまを述る花科 郡
中ニ有る表門ニ浪風来の故忌
へを心つかひ又従不具の嫌一座ニ
於会のおすゝめてすへし
発句のみにかき述を依る

為しとし

一 百韻脇ハ亭主の句なりと當座ハ云
然れとも前尾ニよるへし客発句
とて当ハ亭主より挨拶す一句発
句をかす脇もさらへてもよくいひかけ
て挨拶を付るも亭主の句
またる所見挨拶もの月花の事
のことく句ニそも挨拶の心なり
との発句ニ発句三月ニよるる京都
初る時ハ招ねて当季をよむへし
是ハ連歌の習ひし例にする其心
つかひし

一 百韻発句ニ非祝歌発句の一事
ゐる付ニ兼しても招すへしれと何
ニ初ますとも付るへし細き
祝ひ祈との季一面ニ出して句ハ
招ニ悪句ても有へし只発句ニ
よろへし對付遠付手法ニ付る
よる句中ニ飛を入る好むる句ほし
句ハ文字法ニよろしく付へからず

月花にいるゝ句は決りの事一座對
會席の心とおもふへし然共次ハ六
せん發句如くとよく吟味さるゝ
るゝかんにとも作意より句案を付
らさる様に挨拶してよく能々定を
て挨拶すへし心とゝられは世話にし
く無下なることもしたとへハ連歌の發
句ハ脇句の唱句と挨ハ對し此挨
拶を以文言を當て詠む脇句に徹て韻
とす

一 第三句目は三の大付として挨拶しても
よろしくすへし威嚴は留りのこと
第三は格別に定法よりの格式之
事を用る迄に慣ひの切字の
發句の時ハ第三に留り字ことを先
作と云事はいへり慣ひの句二句を
なさ說ハしとふのつ字字切り
句中に押字有やうのつ何字とも
の數之發句にかうて押字たく
てそねらへり一字そ留こなきん

ちるんの数たるへき留りの發句の
第三に來く留を忌と云事もあり
是治定の事なりされど花のさ
かりの月の光りなとの取合せなり
まく光りてそといふに通ハさすて
にある母留者しかしそ留を
きらふへし文字留りは留り
武りはりて古法に従ひることゝ一
說古事に依る眼の句韻字留
め有情非情に文字留り並ハ留る
ゆへに留ることもなし根本まで
留ハ第三文字にて留り新の句
ハ是人の作りはさその留をさける
す是式部のありて第三ハ挨拶する
をあることすれども眼の句による
ハ遠附なれとも附合の句の時ハ
第三にて挨拶するに及ばさることゝし
發句悪非體末の物にて眼これ
に残すへき時第三にて取り發見を
挨してあれてすへしと定り

一四句目ハ軽くする四句めぶりといふて
軽くうるおひをよしとす発句おもき
は四句めの前にて(?)軽く(?)して据(?)かへるゆへ
る中に花をもちゐる吉事なれ(?)とも
ときハ(?)好(?)もなく其秋の季をつけ四
句めにハ花月の句をすること好(?)ま
けれと定り

一発句より句めも七句めの(?)内二て定説な
とし古説ハ(?)七句めも用ゆ(?)とも
第三の後一巡上の句を嫌(?)とす中ま
ま(?)月の出(?)ハ名所或(?)ハ恋句(?)の表など(?)に
出(?)て同字を嫌ひきらひ略(?)を嫌(?)ふを
たゞ(?)あらためて当季の字句(?)ハ句の
一巡表の具(?)之面(?)すく(?)寄(?)て定(?)まる八
木とも逢(?)ふ家に古説ハ四句めを
をきハ八句めに定る季植物(?)を花
手(?)つゆる者(?)ハ逢(?)ひ(?)て[illegible]を(?)嫌(?)ふ
けれ(?)ど(?)徳(?)の句をうつすハ(?)次(?)に居(?)
八落(?)を貴(?)へし是(?)ハ其しの花といふ
ありその句に秋の季(?)を引(?)かず

居し座の花ハ花のしき(?)葉とも(?)
初て(?)出る句より(?)定めなき(?)定説(?)
かし月の定座をこなす(?)てに五十句よ
里(?)内より(?)えうちて(?)奥に出て(?)八句めの
其(?)まもなる(?)と也(?)古説ハ(?)若(?)しく(?)る
中しも(?)男(?)の表(?)に月の中(?)月の字(?)を
て(?)会合(?)する時ハ其(?)名ミす(?)へし其
名(?)代(?)法(?)方へしの(?)化(?)言(?)に[illegible]へて(?)と
定り

一発句月ハ上の句もう(?)へし発句(?)も
月の句(?)を嫌(?)ふへし時にまる(?)へし(?)[illegible]
はし(?)月(?)星月(?)秋ハ秋にて(?)定(?)の月
にハ(?)はし(?)て(?)発句に加(?)る時を
素(?)秋(?)にハ(?)他(?)季にて(?)も(?)よ(?)ろし(?)と(?)す
是(?)月と云(?)字(?)に(?)て(?)も(?)句(?)と(?)新(?)式(?)に
あり

一発句表に月二つ(?)也(?)れ(?)り(?)あり(?)[illegible]
其月数(?)八つ(?)と(?)花の(?)表(?)ハ(?)也(?)れ(?)に(?)て(?)月(?)
あ(?)し(?)花(?)のと(?)く(?)八(?)花(?)四(?)本(?)の(?)内(?)下(?)の(?)句(?)ハ
一句(?)その(?)定(?)座(?)ハ(?)や(?)れ(?)の(?)まま(?)と(?)す(?)

なりゆくしとなし

一 古法ニ要花の句并句への付心の又
手二句の心の実ハ梅菊牡丹杯と下
心すくしも在に花の花ニかくてる句き
木草ニ寄てゝとも季をおする事きる
要ハ正月ニ花を見る又五月ニ茶暖
あと云るいふと句したる四五月
ニ花咲杯と云句ハ非てしなき
とくたとへ花木を隠しく花と
なり云とも正花と花と云ハ桜
の事なりかくも春の花を正花
を正花と定しも花の句多く出
る貴人の為し宗祇の時代まて百韻
花二本と雨一ツと宗長の時より
白ひの花一本句一ツ物語を紫哥
巻ふきくれて花四本句二ツとき
寄り侍る連歌の式とかさまつり
一 花四季一順の事も神のとくかくて
と云する事かみを退ても成すと
あり

一 前句挙句ハ付さるもよしと云説あり
今句ニ続し一巻異に成る存て又
五く案し面とさへ前句立事
ニ事なす事ニ寄しれ和の一順
ニ執筆の句者く八挙句を事事
へし発句まて文字を隠む之是
の花て季季五句ニ面とも
挙句ニ表ニを季すへしれたとく
季ニ穴句ニあひても季すへし又
の季恋ても挙句ばんの句也
ア心得へしとと
一 前末和の桃ニ門人好の風雅を
阿好とのことにて百変更
すゐのともに艾境子制の三家
たまれ三ツ中にいまし二を
出さといふおもむくのさる
ニ俳諧ハ表ニ依ては本を得すと
云物しまて段なく空
アて侍ますへとしとその
風雅の誹をそは而

一 前句附句八付さるゝやうと云説あり
今句ニ作し一句異なる者之又
無く案し出ともいへり発句ニ手
ニ専ら心をすゝしたる附の一般
ニ挑気のある所く八附句を学ぶ事
〈下〉発句ニて文字を悦む之良
の所にて上季下季の前句ニ通ふとも
附句ニ其季を添すべからざるに之
季ニ句ニおいてもすべしなる
の事無事にても附句は前句ニ句ぬ
かなうべしとそ
一 蕉翁の流ニ八門人出格の風雅を
向ひ内にこのこゝにおいて百変百化
すとのれとも其境ニ至る所の三家
たりこれは必ず三ヶ中ニいづれ一二を
出さぬとことおもしのさぶれ
ニ流派は中ニ俳にまかせとるとき
云ひし事して発ぐるく心を修
にて俳ニのへしとのせ流ニ
風雅の誠をせめ悟てこれす所流

誰に偏る人もなし
一 福田能登守に三合ずゝ七合と露
さりとやしきれけり
一 桃先之酒若みへし佐竹の勢謝まで
弁八ツ時ひしくやう何両人ずゝ見
浦種束之雅楽頭とのへまて悠日加
此に浦蔵の源中より笛吹の様下まで
之百餘丁を晒すと民我徳にまて世
家
きのふよう浦ろいや若物六千三余束
みなくしきしの人白雨の非
泰為のうちに数達来してひし狂想に
同し神のたれとも米某之合にきたし浅
の深く大にたゝより右衛門の よみくしれ
井戸のそこまでお果よりまし
源氏之参に合せ八百万石の損なき
しと実ひし損つひて京まで一ぞ
内外ふ河あされ鬼の皆それ 桃え
まし一門さくまよましくねて

皇和學園蔵 大校 第654号 昭36.3.14